

士博學法・授教學大田稻早

著雄美登野中

312.1

N483n

# 制體贊翼本日

版社論公新



\*0005009000\*

0005009-000

312.1-N483n

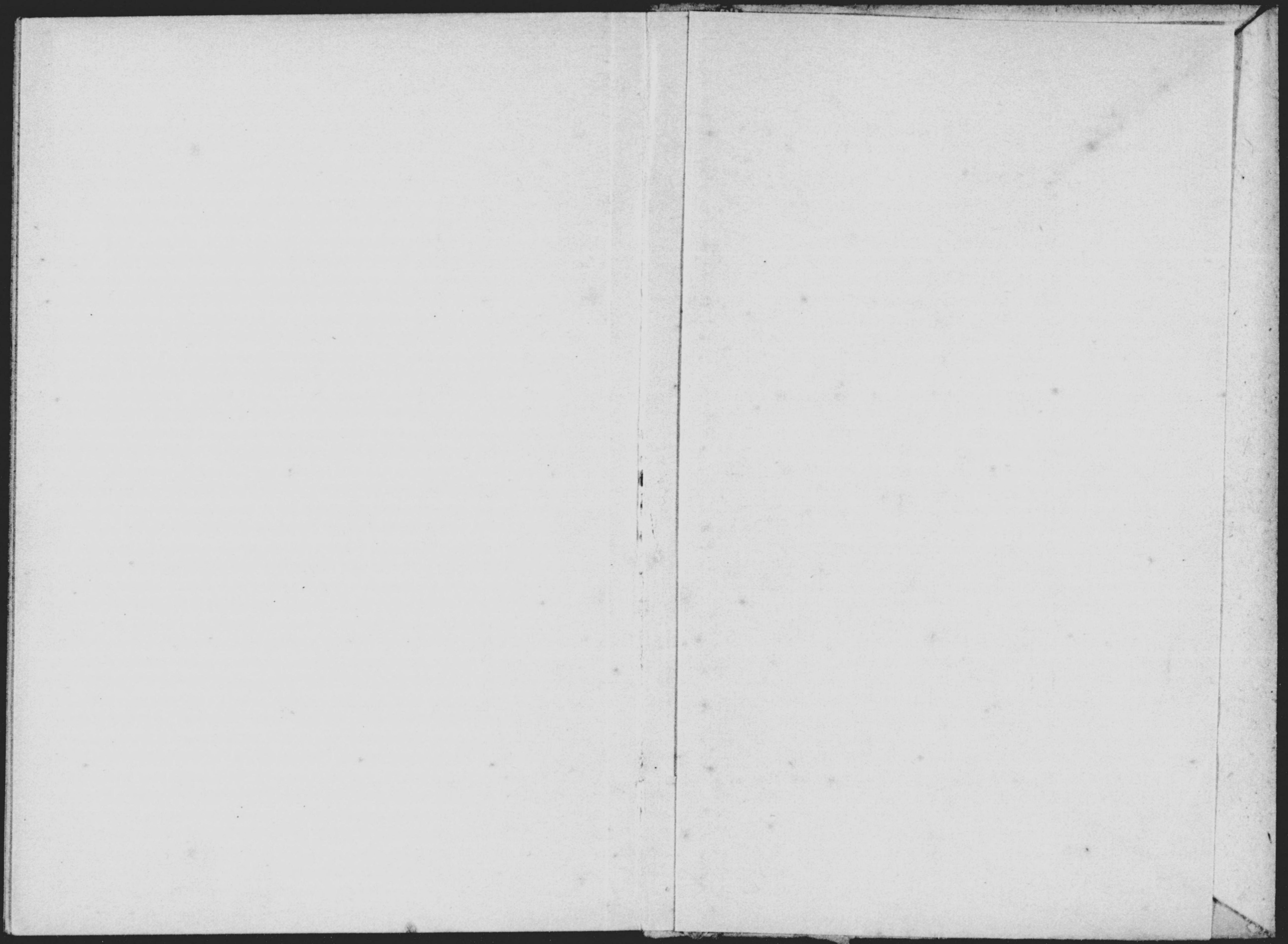
日本翼贊体制

中野登美雄・著

新公論社

1941

ABC



早稻田大學教授  
法學博士

中野登美雄著

# 日本翼賛體制

新公論社版

312.1  
N483n



寄贈  
淺沼孝子殿

639253

### 序 言

本書は、昨年六月近衛公爵を中心とする所謂「新黨」運動の胎動から第二次近衛内閣の成立と大政翼賛會の結成、並びに日獨伊三國條約及び日支國交調整基本條約の締結等を経て第七十六回帝國議會の開會に至るまでの間に於いて、學國體制運動に關して著者が與へたる論稿を輯録したるものである。日本民族の世界史的興亡を決定する日本國防國家建設の政治と世界觀的問題に關する時事論策であることは自然であつて、専ら一學究とし一日本國民としての奉公協力の微衷と憂國の至情に出づるものに外ならない。匆々の間にものしたことであり形式内容ともに貧しきを免れないが、それにも拘らず著者の見解や警告がその後の現象によつて正しいことを實證されてゐるものが少くないことは、私かに満足するところである。著者は昨年四月『戰時に於ける政治と公法』を公にしたが、本書はその姉

妹篇ともいひ得べきものであつて、もしその舊著とともに識者の参考となるものありとすれば、著者の満足これに如くものはない。

なほ無用の刺戟を避くるため用語に注意したつもりであるが、たとへ強調に過ぎるやうな點があるにしても、それは何等個人的意味を有するものではないことを諒とされたい。

昭和十六年二月

中野登美雄

本書を陣歿皇軍勇士の  
英靈に捧ぐ――

# 日本翼賛體制 目次

序言……………一

第一章 現代と政治の歴史的使命……………一五

第一節 歴史の試煉と新舊世界觀……………一五

第二節 近代政治の矛盾と歴史の淘汰……………一七

第三節 現代の政治的使命と自由民主主義的多黨主義の清算過程……………一九

第四節 我國に於ける多黨主義清算運動の胎動……………二三

第五節 批 判……………二四

第六節 我國學國體制の前提と可能性……………二六

第二章 歐米に於ける學國體制運動と

その型態……………三〇

第一節 歐米に於ける學國體制運動の趨勢……………三〇

第二節 學國體制の型態……………三三

第三節 我國に於ける運動の特異性……………三五

第三章 新政治體制運動の胎動とその批判……………三九

第一節 運動の歴史的必然性……………三九

第二節 運動中核の人的構成……………四一

第三節 運動の理念……………四三

第四節 政治新體制運動とその性格……………四五

第四章 近衛内閣の使命…………… 六

第一節 近衛内閣の使命…………… 六

第二節 新體制と既成政黨…………… 六

第三節 前途の障碍とその克服…………… 六

第五章 政治指導と統帥…………… 七

第一節 自由主義的政治體制に於ける政治と統帥の性格的矛盾…………… 七

第二節 政治精神と軍精神の個性…………… 七

第三節 反政黨主義的政治體制に於ける政治と統帥の性格的共通性…………… 八

同性…………… 八

第四節 翼賛體制に於ける政治指導と統帥權の獨立…………… 八

第五節 國防國家體制と國防に於る形式的二元主義的觀念の止揚…………… 八

第六章 翼賛體制と行政の指導…………… 九

第一節 翼賛體制の世界政策的前提…………… 九

第二節 翼賛體制と國家機構及び國民生活の有機的統一…………… 九

第三節 翼賛體制と二元主義的行政精神の克服…………… 九

第七章 翼賛體制と統帥權…………… 一〇

第一節 多黨主義的政治體制に於ける政治と統帥相剋の準宿命  
的性質…………… 一〇

第二節 反政黨反多黨主義的體制と政治及び軍事の國防國家體制…………… 一〇

第三節 我國新政治體制と統帥及び政治調和の可能性の問題…………… 一〇

第八章 國防國家體制的確立に於ける

政府と軍部の責任…………… 一一

第一節	國防に於ける政治と統帥の調和並にその條件	一三
第二節	世界觀的條件	一三
第三節	人的條件	一五
第四節	機構的條件	一六
第五節	輔佐機關の責任	二〇

### 第九章 立法翼賛體制の育成

第一節	立法翼賛體制	二三
第二節	翼賛議會體制の指標	二三
第三節	翼賛議會の責務	二四

### 第十章 翼賛運動とその機能強化

第一節	翼賛體制と指導者の責任	二七
-----	-------------	----

第二節	翼賛體制と日本の性格	二四〇
第三節	大政翼賛會の結成と議會	二四二
第四節	理論人的性格と政治人的性格	二四七
第五節	臣道實踐と國防の倫理	二五〇
第六節	惟神道の世界觀	二五二

### 第十一章 政治の危機とその克服

第一節	政治の飢饉	二五五
第二節	協力突破	二五九
第三節	防諜と政治	二六三
第四節	常侍輔弼責任の合理化	二六四
第五節	無省主義の合理化	二六六
第六節	官界新體制	二七〇



第七節 翼賛會の改組問題と臣道實踐の絶對性……………一七三

第八節 身分保障制度の撤廢……………一七五

第十二章 臨時中央協力會議……………一七九

第一節 臨時中央協力會議の招集……………一七九

第二節 臨時中央協力會議所感……………一八一

第十三章 下意上達機關としての中央協力會議に就て……………一八五

第一節 はしがき……………一八五

第二節 協力會議の精神……………一八六

第三節 協力會議の組織と機能……………一九〇

附 録

第一章 英帝國主義擊碎と興亞日本の覺醒……………一九七

第一節 内部的敵性の暴露……………一九七

第二節 自由主義の阿片的機能……………二〇〇

第二章 東亞新建設と日本の再出發……………二〇五

第三章 新政治體制と軍部……………二二三

第一節 政治の存在的意義と統帥……………二二三

第二節 政治と統帥の摩擦……………二二六

第三節 摩擦と調和の世界觀的根源……………二三五

第四節 新政治體制の下に於ける調整の可能性と條件……………二四三

日本翼賛體制

## 第一章 現代と政治の歴史的使命

### 第一節 歴史の試煉と新舊世界観

世界は單なる存在でもなく、亦單なる流轉や進化でもなく吾々人間に課せられた文化的創造的使命達成の活舞臺である。故に國家生活の領域に於て存在論の靜態的形式的な世界観を前提とし、政治の意義や目的を單なる歴史的な合法性や現状の維持保存に求め、非創造的な秩序や權力の維持を以て政治の原理とする保守主義が、歴史の試煉に堪へ得ないと共に、一方に於ては流轉や進化の動態的世界観に出發し、事態の動向發展を助成し、若しくは之に適應するを以て政治の意義目的であると信じ、自由や唯物的必然性を政治の原理とする自由主義やマルキシズムの政治観、が歴史觀的にいはゞ前コベルニカス式であり、

歴史の法廷に於て勝者たり得ないことも當然である。

蓋し靜態的世界觀や動態的世界觀、これを政治的に言へば保守主義のイデオロギーや進化論や自由主義やマルキシズムの政治觀の基本的態度は完成または完結の世界觀、人生觀ではなく、せい／＼世界觀的綜合に於ける正と反のテーゼにすぎず、これは理論的に言へば對象そのものが單なる形式や單なる内容そのものではなく「及び」による兩者の綜合的統一であり、理論の世界は斯くの如き綜合の舞臺である様に、世界一般特に國家的政治的生活も單なる秩序や保存の「靜」の形式でもなく亦自由や唯物的必然を「法則」とする發展進化と適應の單純なる「動」の内容でもない。政治は法的秩序を手段とし、而も自由によつて制限せらるゝ事なき權威と指導の機能であり、必然的なものを素材とし、正しき世界觀を知性の妥當なる活用に基く指導に依つて、實在内容の創造を目的とする社會的創造的綜合の技術であり、また最高の社會的藝術に他ならない。

## 第二節 近代政治の矛盾と歴史の淘汰

このゆゑに妥當でない世界觀を前提とする傳統的な議會主義的政治體制或は、多黨主義の政治機構が現代の政治及び社會的實在の下に於て基本的に生命を失ひ、今日多くの國家に於て、歴史化の過程を辿りつゝあることは敢て怪むに足らないのであつて、自由民主主義の祖國であり亦其繁榮の地でもある歐米の諸國に於ても、過去一世紀半に互る民主主義の歴史は、最も基本的な點に於て自由民主主義的な政治體制としての「法治主義」の缺陷を白日のもとに曝し其擬制と偽善性を明白に物語つてゐる。

蓋し法治國家的イデオロギーは法主權(法律主權)的な權力分立主義並に之に伴ふ責任政治の原則の制度的實現に依り、政治的權力的現象を法的秩序の完き支配と統制下に置き、之に依つて政治現象の合理的合理化を可能ならしめると共に、同時に之に依つて亦個人を保護し其自由と平等を擁護し得べきものと信ずるものであるが、而も「國民代表」の議會

制度に依る國家權力の對「社會」的解放は「法治主義」の名に於て金力や暴力の權力政治を可能ならしめてゐるからである。ゆゑに個人を保護し不合理なる權力現象を合理化するがために考案された法治機構は、反對に無力なる個人を貧慾且つ残忍な金權や無產者の階級的獨裁の唯物的勢力の犠牲たらしめ、國家機構をして變質化せしめ、その本來の目的とは全く異つた外來的目的の手段として存在するに至らしめて居る。ゆゑに「法治主義」の合理主義的生命とも見なし得べき討論と、説得の議會主義的機構、力の量に依る政治ではなく、公開の席上に於ける甲乙論駁の辯證法的過程に依つて、政治的眞理の發見に到達しようとする「選良」の代議機構が、議會の内部に於ける多黨的勢力や、其背後にあり之を操縦する多元的社會的勢力の惡質の取引、妥協や其相互的抗爭に依つて一個の喜劇的カラクリと化し、單に形式的に「機能」するか又は機能麻痺に陥り、遂には左右いづれかの獨裁を招來し、議會主義の没落を餘儀なからしむるに至るのは自然である。

之れ蓋し自由民主主義の出發點であり、其基本概念である自由にして平等なる完結の個人は實在の個人ではなく、理想や空想の個人であつて、獨り正しく且つ強力なる國家的權

力の保護と其助成保育指導に依つてのみ、多少とも期待し得らるゝ將來の個人であり、實在の個人は國家の保護、其正しき指導を外にしては共存し繁榮し能はざる存在に他ならないのであるから、自由民主主義的イデオロギーの欲するが如くに國家權力を「社會」に解放するに於ては實權は個人の犠牲に於て利己的な社會集團の手に歸すべく、而して社會的集團的勢力は其自身に於て多元的であり抗爭分立的なる傾向を有するが故に、國家權力の自由民主主義的解放や「社會」に依る其征服と接收とは其自然の結果として國家の分裂又は解體に導く危険あることは當然だと言はざるを得ない。

### 第三節 現代の政治的使命と自由民主主義的

#### 多黨主義の清算過程

斯くの如くに十九世紀的な傳統的政治體制の前提とする自由民主主義的イデオロギーは國家統治または政治指導の本質に反するものであり、法と生活の離反乖離を激化して國家に對する國民の威服信賴の念を失はしめ、國家をして指導力なき空虚無意味な形式的存在

に墮せしむる傾きがある。

されば自由主義的多黨主義を克服し、明確適正なる創造的進化の世界觀と知性の妥當なる活用によつて政治指導の原理を確立し、萎微した國家機構に強力なる活力を注入し之を有機的ならしむる事は、現代の指導者に課せられた最高の社會的義務であり、國家的使命であつて、之れ十九世紀の歴史的條件が現代各民族の文化に對して求めてゐる其存在と創造的進化の貴重なる對價でもある。勿論この現代的使命の達成は、如何に卓越した文化や指導者のもとに於ても、絶大な困難と犠牲を伴ふことは避け難く、一朝一夕にして行はれ得べきものでないことは多言をまたない。例を歐洲にとつて言へば、イタリーに於ては半世紀に亙る自由主義體制の先驅の時代を経て、運動はなほ十年に及ぶイデオロギーの準備と決死闘争の難行によつて實を結び、またドイツに於ては第一帝國時代を除いても十四年に亙る最も爛熟した第一次世界大戰後の自由民主主義の體驗、スペインに於ては中斷期間はあるにしても、一世紀餘の自由主義時代、ポルトガルにあつては八十年近くに亙る多黨主義の時代を經、而して是等いづれの國に於ても新秩序の建設には、さらに十四年に亙る

闘争と決死革命の犠牲的手段を必要とした。

以上の諸國(ソヴェエトロシアは別としても)は今日既に國內の新秩序が確立され、傳統的政治體制の清算された國家であるが、多黨主義の清算と新たなる政治指導確立の運動は尙ほ多くの國家に於て行はれ、又は行はれつゝある事にも注意されなければならない。茲に其總てを列挙するの必要はないが、今其主なるものを擧げるならば、同様の試みは今日既に大獨逸に併合されてゐる塊太利に於て曾つて行はれ(Vaterlandische Front)た事は廣く知らるゝ如くであるが、明瞭な形に於ては現はるゝには至らなかつたが、獨ソ兩國によつて分割の對象とされたポーランドに於ける「政府ブロック」も其内在的傾向に於て同様の素質を持つてゐたものと云ひ得るであらう。が、ポーランドは別としても、反多黨主義の運動はベルギー (1) L' Union des nationauxsolidaristes 首領 Van Severen; 2) La Légion nationale belge. 首領 Paul Hoornaert; 3) La Ligue Nationale Corporative. 首領 Mussert)に於ても、デンマーク (Parti national-socialiste) 英國(無力ではあるがサー・オスワルド、モスレー一派の運動)ノールウヘー (L'Association nationale. 首領、

Majar Vidkuh Quising) スイス (1) Le Front National. 首領 Rolf Henne; 2 Le fascisme suisse. 首領 Arthur Fonjalaz; 3) Le Union populaire 首領 Son-dereger) ハンガリー (Le parti socialiste 首領 Alexander Festics) ルーマニア (1, La garde de fer. 首領 C. Condreanu. 2 La ligue national corporatiste. 首領 Mihail Manoiliscs) ブルガリア (La defence de la patrie: L' Union des legions nationales des jeunes; Le Federation nationale fasciste.) 並びに南米の一部の國に於ても存在する多黨主義の清算と唯一的な國民的政治體制樹立の形式は、國情によつて必ずしも同一ではなく或は全體主義的な運動による革命の結果たる場合があり、或は民族の獨立解放を目的とする既に政權を有する軍人又は政治家の上からの働きの結果たる場合がある。體制の唯一的地位も國によつて其性質を異にし、或は法的獨占たり或は事實上の獨占たるものがある。亦政府、軍、各種職能的組織に對する關係も一樣でなく、或は併行的な型のものがあり、或は超越的な型のものがあり或は從屬的な型のものがある。

#### 第四節 我國に於ける多黨主義清算運動の胎動

わが國に於ても憲政が實施されて以來、すでに半世紀を経、此間次第に培はれた政黨主義は、大正から昭和の初めにかけてのいはゆる華やかな時代を最後に、その機能を停止し單に形式的存在を維持するに過ぎない觀を呈するに至つてからすでに數年を経てゐる。既成政黨の没落は新たな政治指導體制の決定的必要を意味するものであることは言ふ迄もなく、國民的基礎を有する強力な指導體制のいかに必要であり、わが國家的存在と其民族的創造力の缺く可からざる組織的條件であるかは政黨主義の没落に伴つて現はれた、謂はば事務管理的な吏僚政治の苦き經驗によつて、國民は何人もこれを認めざる得ないであらう。國民的聯絡なく、民族生命の琴線にふれない施政は國政をして無力ならしめ、無力なる政治はその日ぐらしの無責任と虚偽の形式政治を生み、法と統治の生命を失はしめ國家生活を破壊する。ゆゑに此數年來の指導力なく經綸なき吏僚政治の機構が國の威信を内外

に失墜し、美風良俗を害ね國民の自信を失はしめるに至つたことは當然である。

それであるから事變勃發以來、國民再編成が各方面に叫ばれ、これを可能ならしむべき新たなる政治指導體制の樹立が要望されて來たのは極めて當然な現象であつて、若しこの要望が今すこし早く實現の機運に接するを得たならば、今日わが國が直面してゐる様な内外の困難なる事態は、たとひ絶對的には避け得なかつたにしても、少くとも之を緩和するを得たであらうと思はれる。此點に於て最近この多年の要望が漸く政黨指導者間内で考慮せられ、近衛公を中心とする強力政黨の結成を可能ならしめようとする機運が現實化するに至つたことは、晩蒔きながらわが國政黨指導者の國家的忠誠と活力の證左として喜ばしい現象と言はなければならぬ。

## 第五節 批 判

勿論強力指導組織と言つても目下のところでは單に誕生直後の状態にあるに止まり其具

體的性質は事態今後の進展にまたざるを得ない。が運動のこれまでの一般に知られた経過から推して言へば、その組織はいはゆる舉國體制と又は國民的政治指導體制とは種々な點に於て異なつた性質を有するものであり、時代の要求する健全なる眞の翼賛體制の實現は我が國に於てはなほ前途遼遠であると言はなければならぬ。

蓋し強力政治指導體制はそのイデオロギーに於て「強力性」を有し權威的なることを必要とし、従つて自己の主張に對しては本來絶對的普遍的妥當性を要求するがゆゑに妥協を許さず、いはゆる總國家的總國民的であつて自己の世界觀や國家觀に反するいかなる政黨の存在をも許さない。故にその組織や行動に於ても絶對的戰闘的であり、其法律上事實上の唯一性は反對黨との久しきに互る理論と實踐闘争の結果として戦ひ取つたものである。故に組織の國民的舉國的性質は多年に互る試煉と淘汰の賜物であつて、一片の形式的な手續きに依つて作り與へられる温室育ちの存在ではない。この點において我が國において期待されてゐる強力政治體制は既成黨人を組織の實體とし、別に、國民各層の代表者をも容れ既成政黨の相互的境界線を解消した政黨人と近衛公の合作であり、たとへ時代の壓力の



然らしむる所であるとは言へ急造の憾あり、強靱性を缺く嫌ひあるを免れない。これ一面においては外國に於ける如き徹底的批判的鬭争的な政黨の存在を許さざる我國特殊の國情によるものであり、また部分的には、我國の多黨主義が既に抵抗力を失ひ變質化の過程に置かれてゐる事にも由るものであるが、それにしても多黨主義の横の線を抹消し、單に政黨の縦の線の學國的解放的延長によつて畫かれた新指導體制の設計が果して、眞に耐震的なるべきか極めて疑はしいと言はなければならぬ。

故に組織をして眞に強力なるものたらしめ、革新的なるものたらしむる爲めには新組織をして種々なるイデオロギーや利害の戰時學國的な偽裝たらしめない事を必要とする。これが爲には數量主義や形式の美に重きをおく傳統政治の數量主義や、形式主義を徹底的に廢棄し、専ら實に重きをおくべきであらう。ゆゑに指導者の選定は思想、人物ともに嚴格である事が必要であり、既成黨人をそのまま新機構に取り入れるが如きは勿論避けなければならぬ。特に問題となるのは運動の首領たるべき指導者と此指導者に於て、その表現を有する世界觀と政治指導の根本原理である。近衛公が人物識見に於てすぐれた貴族であ

る事は廣く認められてゐる所であるが、その門地や性格から言つて近衛公に對して所要の政治人的、威力人的強力性を直に期待することは無理であると云はざるを得ない。

蓋し現代の指導者はルッソーの獨創性と、ダントンの革命的力量、並びにナポレオンの軍事的政治的才能を必要とし、思想家革新家及び軍事政治の統一調和者の三位一體の人物たる事を必要とする。が、たとひ我國に於てダントンの資質はこれを必要としないにしても、少くとも破邪顯正の一身を國に捧ぐる道徳的勇氣と軍事と、政治との一元化を可能ならしめ、民族の倫理と本能をその一身に於て體現する能力を必要とするが、斯くの如き資質は、英雄の天才的資質であつて、直ちに期待され得べきものでないからである。この故にたとひ新體制が近衛公を首領として成立するにしても、それは單に將來の新たなる政治への橋渡しの機能を有し得るに止まるものと見なされなければならぬ。

## 第六節 我國學國體制の前提と可能性

私は前に新時代の政治指導者たるべきものは、民族の本能と倫理を直視し、之を其指導原理と政策に於て表現するものでなければならぬと言つた。換言すればわが國政治の指導者たるべきものは、日本精神を把握し、體現する者である事を必要とする。これ新時代の政治指導の最少限度の前提でなければならぬ。茲に日本精神の構造を論ずる事は省略せざるを得ないが、一言にして之を言へば、日本精神は之を皇道主義的超人格主義と稱することが出来る。がこの日本民族の精神に内在する基本的態度は、保守主義と自由民主主義其他の近代主義の世界觀的並びに方法的對立を解消廢罷し、兩者の一方的見解を克服する意義を有する。蓋し皇道即ち惟神道は神勅の奉承祖述による國家の不斷の創造發展であり、其動態的なるの點に於て、宇宙の原理を保存に求むる形而上學的存在論の靜態主義及び歴史の領域に於ける保守主義を克服するものであると共に、一方に於てはまた皇道主義

の動態性は行動的主動的實踐的なる事に於て環境への適應を生活の原理とするの止むなからしめる進化論的必然主義の機械的展開主義をも克服するものであるからだ。保守主義は歴史の創造發展を妨げる反動的な政治的現状維持主義の前提となつてをり、また進化論的必然主義は無政府主義やマルキシズム並びに歴史主義の基礎をなし、また十九世紀に至つては、自由主義にも重要な影響を與へた態度である。故に斯くの如き基本的態度を克服する日本精神の世界觀は、同時に之によつて基本的に、此らの政治的社會的イデオロギ―を克服し覆滅する基礎を有するものと言ひ得べきである。

されば、若し我國の政治家であつて、日本精神を明確に把握する力と知性の妥當なる活用能力を有する限り、我國に於て新らしい學國的體制を可能ならしむることは、必ずしも困難ではないと思惟するものであつて、此點に於て目下實踐しつゝある新政治體制の運動がたとひ不完全であつても、其實を結び指導者の養成によつて完き體制確立への橋渡しの機能を果さんことを望んで止まないものである。

## 第二章 歐米に於ける舉國體制運動とその型態

### 第一節 歐米に於ける舉國體制運動の趨勢

十九世紀は政治の近代主義が全世界を風靡した時代なるに反して、第一次世界大戦を序幕とする現代の歴史は、その消極的破壊的側面においては多黨的な自由民主主義の政治及び生活体制の崩壊没落の歴史であり、その積極的側面においては、全體主義の政治及び生活体制建設の歴史であるといつて、敢へて過言ではあるまい。

多黨主義並びにその前提とする自由民主主義は、理論的には歐洲においては既に十九世紀後半期において防禦的地位に置かれ、自らの歴史が暴露するに至つた多くの内在的缺陷は、歴史主義や歴史的意識の勃興と相俟つて、内においては自由民主主義的傳統の民心に

對する支配力の失墜となり、外は左右兩翼よりの理論的脅威を大ならしめ、十九世紀末から廿世紀の初頭においては、自由民主主義の理論的陣營の内部において種々なる懷疑的批判的見解を生み、前途落莫の感あらしめたのであつた。

だが、多黨主義の存在を根底から搖がす脅威を與へたものは、いふまでもなく世界大戦がもたらした新たな勢力であつて、その一は共產主義の獨裁政治であり、その二は一九二二年におけるファシスト政權の確立である。

かくて百有余年の歴史を有する歐米の傳統的政治體制は左右兩翼よりの挾撃をうけ、右するか左するか何れかの一途を選ばざるを得ない運命の岐路に立つた。が、唯だ一九三三年、ドイツが國民社會主義革命の歴史的決断により多黨主義を一掃するに至るまでは、歐洲大陸における多黨主義の諸國はこれよりさき一九二六年のクーデターを經一九三〇年サラツァールによつて舉國體制が基本的に確立されたポルトガルを除いては、何れも傳統的政治體制維持の希望を放棄せず、専ら選舉法や議院法の改革によつて危機の切抜けに努力してゐたのであつた。

しかし一度、ナチス政權が確立されてからは全體主義の政治運動は決定的勢力を得、直接、間接ナチスの影響の下にある反自由民主主義的の突撃は、多くの國において執拗に反覆繼續され、その結果は革命又はクーデターによつて體制を一變し、全體主義化するか、又は、傳統的體制を防禦するがため自ら非自由主義的な獨裁制を採り變質するか、若しくは少くとも多黨主義に對して高度の制限を加ふるのやむなきに至り、この間民主主義的傾向の發達を示したものは、ピレネーの溪谷にあるアンドラのみであり、他に威力的傾向を示さざるものは一もなく、またその國內に反自由民主主義的政治運動の發生を見なかつた國家は殆どないといつても過言ではない。

ノールウェー、オランダ、デンマルク、ベルギー、チェッコスロヴァキア、オースタリヤ、スペイン、ダンチヒ、ポーランド、既にソ聯の併合する所となつたバルティック沿岸の諸國、フィンランド、ブルガリア、ルーマニア、ハンガリー、スイス、フランス等の大陸の諸國を始め、海路を起えてはイギリス並びにアイルランド自由國等にも脅威が及んだことは、もつて運動の普遍性を示すものといへよう。

故に、ナチス革命直後の卅四、五年代においてすでに斯くの如くでありとすれば、前にザール、オースタリヤ、チェッコスロヴァキア、ポーランド等の全部または分割併合によつて歐洲の政治地圖を著しく變更したドイツが、今次大戦においてその盟邦イタリアとともに決定的勝利を博した曉において、殘存する自由民主主義的多黨主義や、その生活體制が決定的打撃を受くるであらうことは疑ひの余地なく、更に、獨伊の歐洲制覇がアメリカの國防にもたらす脅威を考ふるならば、國防政治の必要はやがてアメリカに於ても傳統的體制の變質化をやむなからしむる時期が來るであらうことは推察するに困難ではない。

## 第二節 學國體制の型態

斯くの如くに多黨主義から學國的唯一體制主義、自由民主主義から全體主義への政治及び生活體制の變換は、十九世紀の歴史的諸條件が世界大戦を通じて現代にもたらした謂はゆる世紀的轉換の存在的所産であつて、如何に惠まれた環境の下にある國家といへども、

遅かれ早かれその影響を蒙らざるを得ない世界的、一般的現象である。

が、唯だ全體主義體制といひ、または學國政治及び生活體制といつても、その發生、存在の形式及び内容等は、個々の點においては個々の國家や民族の歴史的、社會的事情により、また運動の發達階段によつて同一でないことは自然である。

成立過程の形式からいへば、政黨または軍隊の革命に基くものがあり、或はクーデターの結果として現はるゝものがあり、或はまた戰時總力政治の必要に基く政黨及びその他の勢力の自發的な運動の結果たる場合がある。

その存在形式においては新たな憲法の制定、または改正を伴ふものがあり、或は必ずしも直ちに憲法上の形式的變更を伴はぬものがある。

さらにその世界觀、指導理論、黨の組織、その法律上の地位、國家に對する關係等においてもまた自ら異なるものがある。世界觀においては獨、伊等の場合におけるやうに宗教的色彩をもたないものがあると共に、一方においてはポルトガルの例において見るやうな舊教的自然法觀に、その根源を有するものがある。

指導性においても議會における活動を中心とするものがあり、或は多くの場合において見るやうに、議會における活動を議會外の對國民的指導機關に併行する一翼とするか、または重心を後方に置き、前者には形式的性質を帶びしむるにすぎないものがある。

黨の組織においても準軍隊的な嚴格な規律統制を有し、黨は特別の合法人として存し、特別の裁判權を有し、黨員の資格にも高度の制限を認むるものがあり、或は何人にも黨加入を許容するものがある。

黨の指導的地位に關しても法律上、または事實上の唯一學國的組織として、他の政黨または政派の存在を許さざるものがあり、或は然く排他的獨占的でなく他黨の存在を場合により許容する態度を採つてゐるものがある。

國家に對する關係においても、首腦機關の人的結合による兩者の公けの積極的關係を認めるものがあり、或は黨と國家の關係は法の表面には現はれてゐない全くの事實上の關係たるに止まる場合があり、前者の場合のやうに國家と黨の機關の公けの人的結合を認めてゐる場合においても、その實體的關係においては國家と黨の併行的同格的關係を認むるも

のがあり、或は黨の國家に對する從屬的地位を認むるものがある。

黨と國家の公けの結合關係を認めてゐる國家において、黨首がいかなる地位を有するかは國情によつて異なり、君主制でない國においては黨首は、同時に國家元首たるを普通とし、これに反して君主制の場合においては君主自ら黨首たる場合を除いては、黨首は宰相として存するに止り、君主の法律上の權能は形式的には別段の變化を示してゐない。

### 第三節 我國に於ける運動の特異性

近衛公を中心とする我國の新しい舉國政治體制は當初の豫期に遅れ、今なほ成立の道程にあるので、的確なことはもとより今後の實踐に俟たなければ斷じ得ないが、今まで知られてゐる事實から推して、大體の性質や方向を判斷するならば、種々な點においてわが舉國政治體制は、歐洲の諸國におけるものとは異なるものがあることは明かである。

これ我國特異の國情からして當然なことであるが、まづ第一に體制そのものゝ發生過程

からいへば、我國の新政治體制は、その直接の形式においては革命やクーデターの結果に基づくものではなく、専ら近衛公の意圖を支持せんとする既成政黨及び諸政派のいはゆる發展的解消と、國民上層の代表者の近衛公を中心とする自主的結合に基くものであり、強制や威力の手段によることなき國民的自覺を基礎とするものである。

激烈な手段を基礎とする鬭争をこそ伴はないとはいへ、即興的な所産でないことはいふまでもなく、その歴史的基礎は五・一五事件以來の數次に亘る大小の準革命的現象を始め、直接には既に従事しつゝある支那事變並びに國際情勢の變革によつて既に敷かれてゐるのであつて、従つて客觀的情勢においては、一時の革命やクーデター以上の「必然性」に基くものともいひ得るであらう。否この數年來、聖戰完遂のため我國が拂つた血と財の犠牲はそれ自身、未曾有の革命的意義を有するものといへるであらう。

新政治體制と憲法との關係については、舉國體制はわが憲法の範圍内における組織たらんとするものであつて、將來その機運が熟し 天皇の勅命をもつて憲法條項の改正を議會に附議し給ふ場合は別とし、體制はあくまでも現行憲法の許容する形式と範圍にその組織

と機能を制限されなければならない。

故に新體制の指導機關と國家機關との關係に關しても、法律上の當然の結合關係は考へられない。新體制の最高指導者が現總理大臣たることを適當とするといつても、それは専ら事實上の問題であつて、何人をして内閣の首班たらしむべきかは、固より 天皇の大權に屬し、大權を拘束するが如き憲法に反する組織は、もとより新體制の意圖する所でない事は何人も疑はないところである。

されば新たなる政治並びにこれに基く一般國民の生活體制は、外國の模倣ではあり得ないし、又さうであつてはならないのであつて、その基礎とする世界觀はあくまでも一君萬民の日本民族の生活に内在する世界觀である事を要し、皇道主義的超人格主義でなければならぬ。萬世一系の 天皇を戴く日本民族の倫理と本能とに基礎を有する基本的態度と指導の理論によつてのみ、眞の舉國體制は可能なるべく、この點イタリーやドイツの國民組織の技術的魅力に囚はれて根本理解を忘却する事のないやうに、指導者は十分の注意を必要とする。

### 第三章 新政治體制運動の胎動とその批判

#### 第一節 運動の歴史的必然性

傳統的な多黨主義の政治體制は現代の政治及び社會的實在の下に於ては既に基本的に其生命を失ひ、今日多くの國家に於て歴史化の過程を辿つて居るといつても必ずしも過言でない。蓋し多黨主義政治機構の前提とする自由民主的イデオロギーは、國家統治又は國家的指導の本質に反するものであり、法と生活の離反乖離を激化して、法及び政治に對する大衆の畏服信賴の念を失はしめ、國家をして指導力の無い空虚無意味な形式的存在に墮せしむる傾向があるからである。

故に自由主義的多黨主義を克服し、明確適正な世界觀と知性の妥當なる活用に依つて政

治指導の原理を確立し、萎微した國家機構に生命創造の活力を與へ、之を有機的ならしめる事は、現代の指導者に課せられた最高の社會的義務であり、國家的使命であつて、十九世紀の歴史的條件が現代各民族の文化に對して求めて居る其存在と創造的進化の對價でもある。勿論此使命の達成は如何なる卓越した指導者の下に於ても絶大な困難と犠牲を伴ふことは避け難く、一朝一夕にして行はれ得べきものでないことは言を俟たない。

イタリアに於ては半世紀餘に亙る自由主義體制の時代を経て運動は猶約十年に及ぶ決死の苦難によつて實を結び、またドイツに於ては第一帝國時代を除いても十四年に亙る最も爛熟した大戰後の自由民主主義の體驗、スペインに於ては中斷期間はあるにしても一世紀餘の自由主義時代、ポルトガルに在つては七十八年に亙る多黨主義時代を経、各國共に新秩序の樹立には別に十餘年の血みどろの闘争と決死革命の犠牲的手段を必要とした。

我國に於いても憲政が實施されて以來、既に半世紀を経、此間次第に培はれた政黨主義が、大正から昭和の始めにかけての華やかなる時代を最後に其機能を停止し、單に殘骸を止むるに過ぎない觀を呈するに至つてから既に數年を経てゐる。

既成政黨の機能の停止は新たなる政治指導體制の決定的必要を意味するものである事は言ふまでもなく、國民的基礎を有する強力なる指導體制の如何に必要であり、我國家的存在と其民族的創造發展の欠くべからざる組織的條件であるかは、殆んど國辱的とも謂ふべき無經綸にして、全體として無責任なその日暮しの事變政治に依つて、國民は子供に至るまで、骨に浸み込む程體驗してゐる。

國民的基礎なく民族的生命の琴線に觸れない施政は國政をして無力ならしめ、無力なる政治は其日暮しの無責任と虚偽の形式政治を生み、法と統治の權威を失はしめ國家生活を破壊する。維新以後の施政史上、凡そ此數年來の指導力なき吏僚政治程、我國の威信を内外に失墜し、美俗良風を害し、國民の自信を失はしめた例は稀であらう。

此故に此數年來「國民再編成」が各方面に於て叫ばれ、之を可能ならしむべき新しい政治指導體制の樹立が要望されて來たのは極めて當然の現象であつて、若しこの要望が今少し早く長期戦決意の當初に於て實現の機會を與へられて居たならば、國運の進展は遙かに輝やかしいものであつた事と信ぜられる。



だが、強力政治体制の樹立は今日でも遅くはない。最近多年の要望が漸く政黨指導者の間に於て眞面目に考慮され、既成政黨の自發的解消に依つて、近衛公を中心とする強力體制の結成を可能ならしめんとする機運が現實化するに至つたことは、遲蒔ながら我國政黨指導者の國家的忠誠と活力の證左とし象徴として、誠に悦ばしい現象といはなければならぬ。

此點に於て、數年前から終始一貫強力政治指導體制の樹立を提唱し、率先機運の促進に努力して來た久原房之助氏の勞は、假令同氏に對する色々の世評はあるにしても、兎も角多とすべきであると共に、一方に於ては此運動に決定的意義を有する政友會中島總裁の革新に對する熱意並びに「聖戰貫徹聯盟」の運動も認められるべきであらう。それはともあれ新體制の樹立は素人の運轉に依つて魔の海に突入し悩みあぐんだ事變下の吏僚政治に救ひの手を與ふるの可能性を有するものであるが、この運動をしてその眞の革新的目的を達せしめ創造的意義を有せしむるがためには色々の條件を必要とする。

勿論、強力指導組織と言つても、目下の處では、實踐の緒にあるにすぎないのであつて

其具體的性質は運動今後の進展に俟たざるを得ない。が、運動の是迄の一般に知られて居る経過から推して言へば、我國に於ける問題の組織は種々なる點に於て所謂「單一政黨」とは異つた性質を有する事に注目されなければならない。

歐洲諸國に於ける強力政治指導組織は體制のイデオロギーに於て「強力性」を有し、從つて自己の主張に對しては、絶對的普遍的妥當性を要求し、妥協を許さず總國家的であつて、自己の世界觀、國家觀に反する他の如何なる政黨の存在をも許さない。故に其組織や行動に於ても絶對的戰闘的であり、其法律上又は事實上の單一又は唯一性も反對黨との久しきに亙る鬭争の結果として闘ひ獲つたものである。組織の國民的舉國的性質は多年に亙る試煉と淘汰の賜で、契約や認許其他の一片の形式的な手續で作り與へられた温室育ちの存在でない。

此點に於いて目下實踐過程にある我國の強力體制は、既成黨人を組織の實體とし、別に國民各層の代表者をも入れ、既成政黨の黨線を解消した政黨人と近衛公との合作であり、憂國の至情は充分に認めらるゝにしても、急造の憾あり強靱性を缺く嫌ひあるを免れない

であらう。

これ一面に於ては外國に於けるが如き徹底的に批判的、鬭争的なる政黨の存在を許さざる我國特殊の事情にも由るものであるが、それにしても多黨主義の横斷線を抹消し單に黨線の學國的、開放的延長に依つて畫かれた指導機構の設計が、果して耐震的なるかは疑はざるを得ない。此故に組織をして眞に強力なるものたらしめ、眞に革新的なるものたらしむるがためには、新組織をして種々なるイデオロギーや、利害の戦時擬裝たらしめないことを必要とし、之がためには數量主義や形式の美に重きを置く既成政治の數量主義や、形式主義を徹底的に廢棄し、専ら實に重きを置くべきであらう。故に指導者の選定は、思想人物共に嚴格である事が必要であり、既成黨人をそのまゝ收容するが如きは意味をなさないことは言ふ迄もない。

我國政治の弱體性は、物や一廉の識見あり徳望ある人物の缺乏に基づくものではなく、我民族の倫理と本能を直感し、明確な世界觀と優れた知性の適切な運用に依つて構成された國民指導原理の欠如に在る。

目下の我國に於て最も必要なものは、斯の如き原理と、此原理を體現し渾身の道德的勇氣と責任を以て國民指導に當る人物である。此故に、新指導體制であつて、眞に強力であり國民的權威を有し得るがためには、斯の如き原理と基本政策を明かにし、之を責任を以て實現するに足るべき人物を備へなければならない。近衛公が人物識見に於て最も優れた貴族である事は何人も之を認むるであらうが、それにしても近衛公の地位や我國の直面してゐる内外の情勢に徴して、假令、同公の下に多くの忠誠なる協力者が集るにせよ、今俄かに新體制に對して、眞に革新的な給付を期待する事は無理ではなからうか。要するに新體制の有する意義は、一方に於ては多黨主義の時代的清算の試みの記録たるに在ると共に他方に於ては將來の日本政治の先驅的、經過的、組織たることに在るものと信ずる。

新組織が樹立の曉に於て、それと政府の關係を如何に定むるか、詳言すれば、超越、併立（人的結合）又は從屬の何れの關係を有するものとするか、また新組織と軍の關係並びに他の政派に對する關係を如何にするかは興味ある問題であるが、それは總て將來の問題である。私は新組織の健全なる發達を希望して已まないものであるが、特に新組織の指導

原理に對しては最も大なる關心を持つものである。

## 第二節 運動中核の人的構成

過去一世紀半に亘る政治における近代主義の歴史は、何れの國においても議會主義の宿命的缺陷を暴露してゐないものはなく、議會主義に伴ふ多黨主義の政治體制は程度の相違こそあれ、何處においても法と政治の權威を失はしめ國家をして指導力なき空虚な機構たらしむる傾きがある。

されば國家の本質に基く新たなる價值決斷と知性の健全妥當な活用とによつて、傳統的な自由民主主義のイデオロギーに代るべき新たなる政治の指導原理と體制を確立し、運命の危機に曝された國家生活に起死回生の活力を與ふることは、現代の指導者に課せられた最大の使命でなければならぬ。これ世紀の偉大なる進展がまき起した試煉淘汰の嵐であり、國家や民族の興亡は専らこの歴史的な課題の解決能力如何によつて決せらるゝものと

すふも敢て過言ではあるまい。

國情において基本的に異なるものがあるとはいへ、我國においても憲政の運用が齎した多黨主義の政治的體制は、外國におけると類似の缺陷を暴露し、すでにその機能を停止するに至つてから數年を経てゐる。政黨機能の停止はこれに代るべき新たなる指導體制の決定的必要を示唆するものであることはいふまでもなく、國民的基礎を有する新たなる政治指導體制の如何に必要であり、我國家的存在と民族的發展の基礎條件であるかは、政黨没落後の吏僚政治、特に事變勃發後の國民的基礎なく、民族生命の琴線に觸れ得ない事務管理的政治が最も雄辯にこれを實證してゐる。

ゆゑに最近數年來、いはゆる國民再編成が叫ばれ、これを可能ならしむべき新たなる政治指導體制の確立が要望されて來たのは當然の現象であつて、かくの如き新たなる體制の樹立は、長期戰の決意と共に、總動員法の必然の政治的歸結にほかならない。従つて本來ならばこれに協賛した政黨が率先して斯くの如き機運の促進に努力すべきであつたが、今日に至るまで多黨主義の形式的存在を放棄することなく、事變政治をして舵手なくして舟

を魔海に突入せしむる危険を敢てせしめたのは、國家のため甚だ遺憾であるといはなければならぬ。

だが強力政治指導体制の樹立が必要であることは今日でも變りなく、この點において最近多年の要望實現の機運が政黨の間において具體化せられんとし、既成政黨の自發的解消によつて近衛公を中心とする新指導体制の結成を可能ならしめようとしてゐる事は誠に喜ばしい現象であるといふ事が出来よう。

新體制が如何なる性質と規模とを有するかは、その具體的成立に待たなければならぬが、問題の組織をして、その目的を達成せしめ、創造的意義を持たしむるがためには、一定の消極的並びに積極的條件を必要とする。まづ新體制の消極的條件からいへば問題の組織は苟くもその革新的意義を有し得るがためには、既成政黨を擴大したに過ぎないやうな傳統的政治運用體制の時代的擬裝であつてはならないことである。ゆゑに既成政黨を解消して、黨人をそのままに新體制の下に收容するが如きは、これを避けなければならぬ。故に新體制をして種々なるイデオロギーや、利害の擬裝たらしめないがためには、傳統的

イデオロギーを徹底的に克服することを必要とし、傳統的政治體制の數量主義や形式主義を離脱し、専ら實に重きを置き、眞に人物、思想において卓越した指導者の組織たらしむる事を必要とする。いひ換へれば、新體制は既成政黨のやうに、個人や團體の利益を國家に對して代表する組織であつてはならない。専ら傳統的、指導原理とは異なつた新たな原理のための協同體であることを必要とし、國家の倫理的共同的性質を身をもつて體現し  
絶對の責任と強い道德的勇氣とをもつて挺身國民の指導に當るべき、眞に卓越した指導者  
の結合であることを必要とする。従つてその性質上少數なるべきことは當然であつて、既成政黨員の全部が同時に新たな指導者たるが如きは、その本質に反するものであるといはなければならぬ。

新體制の基礎たり、生命たるべきものは、このゆゑに傳統的指導理論、もしくはイデオロギーを克服するに足るべき新たな世界觀と、これに基く政治理論である。斯くの如き指導理論の確立されない限りは強力政治の確立は困難であつて、たとひ近衛公のもとに既成政黨人その他の忠誠なる協力者が集まるにせよ、何等の質的進歩を見出すことは出来な

い。我が國政治の弱體性は數にあるのではなく、専ら質にあり、識見あり徳望ある人物の  
缺乏に基くものではなく、わが民族の倫理と本能を直觀し、明確なる世界觀と優れた知性  
の適切なる運用によつて構成された國民指導原理の排除にあるからだ。

### 第三節 運動の理念

近衛公を中心とする舉國政治體制樹立の運動は、今事變の我國内外の政治過程において  
其極限に達した觀ある自由主義的政治の内在的矛盾に對して、解消のメスを加へんとする  
ものであり、時難の本質や根源を自覺せず、又は殊更に無視し糊塗擬裝せんとする如き經  
綸なく良心なき泥繩式の亡國的政治に對して、起死回生の活力と更生の良心を與へんとす  
るものにほかならない。わが事變政治をして歴史の交替期、自由民主主義的文化の老廢没  
落期における瀕死の苦悶より離脱せしめ、國政の前途に壯者の力と榮光を與ふる劃期的な  
試みと謂ひ得るであらう。

斯く傳へらるゝ近衛政治體制の出現は、事變勃發以來の朝野の國家的要望に應ずるもの  
であつて、極めて注目さるべく、また喜ぶべき現象であるが、問題の新らしき體制をして  
眞に建設的な意義を有せしめ、其革新的給付を可能ならしむるためには、色々な條件を必  
要とし、「新黨」の革新的創造的意義は、問題の組織が、如何なる程度まで是等の要件を  
具備し、充足し得べきかによつて決定され、左右さるゝを免れない。

茲に是等條件に就て詳論する事は省略せざるを得ないが、なかんづく重要な意義を有す  
るものは、新黨の性格的世界觀的條件でなければならない。此點に於て新政治體制の存在  
理由は、其消極的破壊的側面に於ては、わが國政に於ける十九世紀的な歐米的舶來要素、  
特に政治指導の確立と相容れない多黨主義並びに其前提である自由主義的イデオロギーの  
否定と清掃に求められなければならない。換言すれば新政治體制運動は、其本質理念に於  
て「新黨」であつてはならない。現状に對しては消極的には専ら政黨否定の反政黨主義、  
反自由主義であり、體制とし組織としては、反政黨體制でなければならない。此ゆゑに新  
體制のオルガナイザーや指導者は、既成の勢力が不俱戴天の仇である事を自覺すべく、其

敵性は寸時も之を忘れてはならないのであつて、強靱な眞の指導體制は、政治の實戰的現實的闘争により、既成の自由主義的勢力を撃滅する事によつて、初めて確立される。如何なる形式を採りまた如何に巧妙に擬裝するにせよ、妥協によつては新體制は絶対に生まれ得ない。何となれば新舊體制の相違は、形式や手段の外部的量的相違ではなく、質の相違であり體系や原理の差であり、内的な意向、性格、世界觀の全面的相違で、従つて新體制は其本質を放棄し自己を抹殺することなしには、異質的な既成の體系と、妥協するを得ないからである。

この故に近衛公であつて、眞に國民指導の強力體制を樹立せんとするならば、公と其信念を同じくし、其抱懷する世界觀、政治觀のために生死を共にするを惜しまない忠實且つ卓越した比較的少數の同志を以て闘争を開始し、公の政治指導力の優越性を實證し、確立する事が本來の道筋であらう。政治の實戰的闘争の試煉もなく、既成政黨の形式的解消の無風地帯に、黨のバツチをとつた政治家、インテリ及び職能的利益人を基礎とし、種々なるイデオロギーや利害の混成により、一擧にして世界觀的政治體制が成立し得るものと

信するならば、それは強力政治の本質に對する認識を缺き、理解を缺くものであつて、それは形式的學國的體制であつても、眞の強力政治體制ではあり得ない。これ内容よりも形式を尙び、質よりも量に重きをおく自由主義的政治の形式主義數量主義に墮するものであり、多黨主義的思想の強力政治的擬裝でこそあれ、之を克服する所以ではない。新體制は斯くの如き安價な形式主義や數量主義の傳統を徹底的に廢棄し、清算することによつてのみ可能である。

斯く新指導體制は、其敵手を正確に認識し、闘争によつて其學國的唯一體制的地位を獲得しなければならぬ。學國體制運動が、其精神及び機構に於て戰闘的軍隊的であることとを必要とするのは、この故に自然であるが、更に新體制の存在理由を其積極的側面から觀察するならば「新黨」はその反自由、反政黨主義の當然の前提として、積極的には自由主義的世界觀や國家觀とは異なつた世界觀、特に國家觀を基礎とする運動でなければならぬ。新らしい運動は、集散離合常なき單なる利害の結合であるべきではなく、協同體であり、世界觀國家觀に基く利害を超越した、全人格的性格的な宿命協同體でなければならぬ

い。近衛公が其新黨の積極的存在理由として、如何なる新らしい國家乃至政治觀、並びに其世界觀的前提を有するかは、公の特別の聲明に待たざるを得ないが、新體制の基本たるべき世界觀と國家乃至政治觀は、飽く迄も日本民族の精神に内在する基本的態度と其表現たるべく、日本民族の倫理と本質とを内容とする、眞に世界的創造的なものであることを必要とする。ゆゑに其基本的態度に於ては、一方に於て自由主義やマルキシズムの進化論的環境適應主義や、必然主義の動態的世界觀、並びに保守主義の基本的態度である存在論の靜態的世界觀に對して否定的であるべきであると共に、他方積極的には、わが日本精神に内在する皇道の完結の世界觀、存在論の靜態的世界觀や進化論の動態的世界觀を克服する、創造的進化の世界觀でなければならない。と共にその國家觀は、皇道主義的超人格主義であり、皇道に内在する權威主義、威力主義及び普遍主義を内容とするものであることを必要とする。

#### 第四節 政治新體制運動とその性格

政黨が黨線の抹消や國防色への塗替へに依つて其胎生を祈願してゐた新政治體制運動も「車中談」以來の相次ぐ近衛公の前進的な言動並びに是に協奏的な政府及び軍部の動きに依り最近漸く活潑な胎動を示す様になつた。今や誕生を間近に控へて朝野の關心が専ら新體制の性格並びに其對國家的給付能力如何の豫想に向けられる迄の階段に到達した事は國家のため一應慶賀されて良い事と思はれる。茲に簡単な考察を試みることにしたが、新體制の性格並びに之に伴ふ其給付能力と言つても、誕生前の現在に於ては適確な判断は困難である事は言ふ迄もなく、従つて以下の所論は生くべき政治體制の「新種」としての基準又は屬性に關するものを除いては「兩親」の血液の型や胎生後に於ける「母體」の健康及び胎教等に基く遺傳論や衛生論的な、可能性の範圍を出でないものであることを諒とされたい。

待望されてゐる新政治體制の性格並びに其組織や機能の考察に於て最も決定的意義を有するものは新政治體制の有する基本精神乃至は精神の型であり、新政治體制の前提とする所謂世界觀であり、従つてまた政治乃至國家觀である。何となれば世界觀は性格の構成條件であり、個性の構造であつて運動の組織と機能、従つて其給付能力は此條件を外にしては意味を有し得ないのであつて、來るべき體制が果して新體制であり政治體制の「新種」に屬するか否かは専らこの前提との關聯に於てのみ決定されるからである。

然らば問題の「近衛體制」は期待されてゐる様に「新らしき種」として純血なものであるか又は「新種」を指向してゐるにしても第一としては改良混血種たるに止まり、純血化するがためには、さらに今後幾回かの交種による血の淘汰過程を必要とするものであらうか。

此問題に答ふるに當つては「新種」の基準たり個性たる基本精神は之を其消極的側面と積極的側面の二に分けて觀察する事を必要とする。共に關聯するものである事は言ふ迄もなく、嚴密に言へば前者は後者の消極的な表現に過ぎないものであるが、問題を明瞭なら

しむるがためには、一應區別して考察する事が便宜である。近く生れんとする近衛體制が新種の體制であるか否かは、新體制が是らの條件をどの程度まで具備する可能性を有するかによつて定まるものと謂ひ得よう。

まづ人間、従つて共同生活の層に宿命的に織込まれてゐる歴史的主觀の存在構造、更に直接に言ひ現はせば、政治の存在構造の側面である戰士的、英雄的な鬭争、破壊の現状打破的、消極的側面から言へば新體制が政治の「新しき種」に屬し得るがためには、反自由民主的、反政黨的、反多黨主義たる事を條件とする。新體制運動は其胎生の第一歩に於て「政黨」の解消を直接間接に要請し、以て其反政黨主義的態度を明示してゐるのみならず同様の態度は最近に至つては、天皇の下に於ける國家的諸勢力と國民の統一なかんづく國家的諸勢力の内部に於ては行政部と議會との統一を強調する近衛公の輕井澤山莊に於ける談話によつて精神的前提的形式に於て示されてゐる。蓋し行政部勢力と立法部的勢力の統一は、多元的な國家觀、従つて政黨主義（多黨主義）其ものゝ克服清掃を外にしては不可能であるからだ。



斯くの如くに新體制の運動は政黨從つてまた其前提とする自由民主主義に對しては否定的であり、反政黨的反自由民主的なる點に於て「新體制」の必要とする消極的條件を一應具備するものと謂ひ得るが、なほ一步を進めて觀察するならば、胎動の新體制は胎生の過程から見て純血であり、健全強靱な素質を有するかは疑はしいと謂はざるを得ないであらう。蓋し「新體制」、政治體制の「新種」が有する其學國的、唯一的な排他的獨占的地位は何れの國に於ても新らしき世界觀と、國家乃至政治觀を其一身に於て表現代表する強き性格の首領によつて、指導される運動の多年に亙る理論的實戰的鬭争の結果として獲得されたものであつて、従つて「新體制」は其性格に於て強烈なる鬭争的戰士的性質を有し、また其結果として戰鬭的な組織を有するに反し、我國に於ける問題の體制の「學國的」反政黨的、唯一體制的性質は、胎生の經過から言へば鬭争試煉の結果に基くものではなく、寧ろ多黨主義の「發展的解消」の結果であり、政黨主義の降服や、覆滅の結果に基く近衛公の「欽定」の所産と謂ふよりも寧ろ多黨的、反唯一體制的政力の自主的な黨線の抹消によつて可能ならしめられた既成の諸政力と近衛公の非形式的、暗黙の協定、合作の結果たる感

がある。

更に率直に言へば、兩者の暗黙の非形式的な協定ではなく、「唯一的」「學國的」體制の實體は既成勢力の黨線解消によつて構成され、黨線を抹消した既成勢力が近衛公を首領として迎ふる事によつて、自ら唯一體制的地位を獲得するの感があるゆゑに「主權」は首領たるべき近衛公に在らず、近衛公の下に形式的に寄り合つた多種多様な既成政力に屬するが如き嫌ひあり、新體制に加へらるゝ各界の分子の如きは、刺身のつまの役割を演ずるに過ぎない感がある。勿論私は近衛公が黨線の抹消の好意に報ゆるため、前黨人を一般的に新體制に收容するものとは信じない。何となれば、斯くの如き試みは學國體制の美名に名を藉りて、政黨主義に輸血するに等しく、自らを欺き國を欺くものであつて、有害無益なるを免れないからである。されば新政治指導體制に加入を認められる前黨人の數は少くとも組織結成の當初に於ては多くはあるまいと思はれるが、それにしても政黨線の自發的解消と、前黨人の参加を主なる實體として急速に構成される新體制が胎生上純血であり得ないことは明瞭であらう。今まで傳へられてゐる限りに於ては、胎動の體制が其形式と

實體の離反を示してをり、形式に於ては唯一であり普遍的であるが、實體に於ては妥協性を示し唯一的普遍的な存在を可能ならしむべき強烈なる戰闘的精神や組織並びに手段に對する決斷を缺いてゐるのは、この混血に基く血液の不純に由るものに外ならない。

それであるから、我國目下の政治地位の凝成上混血は已むを得ないものとすれば、新體制の革新的創造的給付能力を強化するがためには、出來得べき限りこれを高度の改良種たらしむるに努むべきであり、之がためには新指導體制の人的構成には量や範圍の美を誇る傳統的な政治の形式主義や數量主義を廢棄し、眞の指導者主義、從つて事の性質上少數者主義を採ることを必要とする。指導體制の構成に數量や形式主義の拙速主義を採る事は傳統政治に對する降服を意味し、新體制の自己抹殺に外ならない。

政治の指導體制は利害や手段に基く結合であるべきではなく、飽くまでも利害を超越した少數の賢者の世界觀的、全人格的、性格的な宿命的結合體である事を必要とする。勿論新體制は其理論的並びに實踐的闘争が或る階段に達した場合に於ては、或る種の決斷を必要とすべく、また其運動の正當性を合法化する事を必要とすべく、斯くして初めて有機的

統一が實現され確保され得る。

斯く胎動の新體制の混血的性質は、其基本精神の消極的側面に於いて既に示されてゐるが、此點は破壊的、現状打破的側面の前提である積極的側面に於いて、更により明瞭に看取される事は當然である。何となれば、破壊的消極的側面は、創造的建設的側面の消極的な表現に外ならないのであつて、新體制の混血的性質、其現状に對する戰闘的破壊的精神の稀薄性は畢竟するに其前提である建設的創造的側面の缺陷に由來するものに外ならないからである。新體制であつて、眞に「新らしき種」の體制であるがためには其消極的側面に於いては徹底的に現状打破的であり、反政黨的反自由民主主義的なる事を必要とすると共に反現狀的な政治的態度の中に於いては、飽く迄も反共產主義的なる事を必要とし、更に積極的には謂はゆる全體主義又は普遍主義的なる事を必要とする事は勿論であるが、特にそれが、我國家生活における大政輔翼の指導體制たるがためには、日本民族の本能と倫理に基礎を有し、日本民族の精神、日本民族の心と血に内在する世界觀と國家觀を内容とするものでなければならぬ。

今や吾々は十九世紀的な諸条件がもたらした歴史的進展の結果として、傳統を反覆「通常人」の様に抵抗の少い線を歩む事によつて没落するか、又は英雄的な決断によつて吾々の前進を阻む抵抗を斷乎として碎破克服し、創造建設の偉大なる民族的榮光を獲得するか、の宿命的な存在の決断を迫られてゐるのだ。わが學國的政治體制は、わが民族的な世界觀と國家觀を基礎とする指導原理によつてのみ確立され得べく、斯くの如き體制によつてのみ大政の國民的輔翼が可能である。されば新體制であつて眞に創造的建設的なり得るがためには其世界觀的國家觀的前提を明確にし、國民指導の原理を確立しなければならぬ。

が此基本的積極的側面に於ても今迄のところ新體制は機構と生活、各部國家機關相互並びに國家機關と國民との統一調和の目標を強調するに止まり、何等統一を可能ならしむべき指導原理を明示してゐない。之れ胎動してゐる體制の最大缺陷であつて、此原理の確立されない限り、新らしき體制の實現は不可能であつて、新體制の指導者達は第二次的な技術的組織問題よりも先づこの根本問題の解決を確保すべきであらう。

この故に、新體制をして眞に其革新的創造的機能を有せしむるがためには、極めて優越

した指導者の存在が絶對の條件である。理想から言へば新體制の最高指導者たるべきものは、日本臣民として大楠公の忠君の至誠を必要とする事は勿論であるが、この當然な前提を外にして言へば、たとひルッソー、カント、ハイデッカーとまでは言はないにしても大思想家たるの獨創性と、チンギスカン、ケマル、ナポレオン、ヒットラー等の軍事的並びに政治的才能又は少くともムッソリーニの軍事的理解と性格及びダントンの革命的、破壊的手腕才能を併せ有する事が望ましい。

斯くの如き三位一體性は獨り賢者、偉大なる天才にのみ求め得べく、指導者の尊敬される所以、強大なる指導力を有する所以も茲に在る。政治は畢竟するに最高の歴史的創造の技術であり、最高の社會的藝術であつて、政治する事、指導する事は學び得ても、政治そのもの指導そのものは他人に傳授し得べきものではなく、天才の作業であると謂はなければならぬ。

## 第四章 近衛内閣の使命

### 第一節 近衛内閣の使命

近衛新内閣の基本的使命が、對外的には支那事變の速かなる收拾と東亞新秩序の建設を確保すると共に、一方に於ては敏速果敢なる新歐米政策の實施に依つて今次大戰を通じ、歐洲を中心として齎されんとしてゐる、來るべき世界的變革に對し、東亞の鐵壁不可侵の地歩を占むるに在る。

ゆゑに對内的には亦、新内閣の使命がこれら日本の世界政策の實現を可能ならしむるに足るべき、現代的國防國家體制の有效迅速なる樹立にあることも、極めて明瞭、争ひの餘地なき所と謂つてよい。

東亞が、我國の主活圏であり、東亞を内容とする生活大圏主義の國際政治上並びに國際法上の確立は、我が民族の生存條件であるにも拘らず、既に支那事變の勃發、並びに歴代事變内閣の施政が、これを實證してゐるやうに、これが有効に實現確保されてゐないのは目的の達成に必要な政治的、並びに軍事的準備の缺陷に基くものであり、政策の一貫と、これが有效果敢なる實行に、缺陷あるに由るものに外ならない。

それであるから、事變勃發以來、或は内閣の主班とし、或は無任所大臣として、自ら苦き經驗を有する近衛公が、多黨主義の政治體制や、事變以來の無力なる吏僚政治の基本的缺陷に鑑みて、自ら進んで反政黨主義の強力政治指導體制樹立に乗り出すこととなつた。それと共に、今回組閣の天命を拜するに當つては、從來の組閣の例に見るやうに、一舉に組閣を完了することなく、先づ軍部大臣及び外務大臣の銓衡を了へ、公を中心とする所謂「四相會議」に於て、國防並びに外交基本政策、統帥と戦争の指導、又は軍部と政府の政策の完き一致を始め、而してのち他の閣僚の銓衡を進め、組閣を完了するの建前を採つたことは、極めて合理的であつて、共に今回の天命を拜受するに當つて、近衛公の決心、そ

の心構への並々でないことも推察に餘りがある。

以上言及した所に依つて見ても明かであるやうに、新近衛内閣の使命は、その對内的組織的側面に於ては、國防國家體制の有効果敢なる樹立にあると共に、この目的達成の手段として、近衛公が特に重きを置く所が、一方に於ては反政黨主義又は舉國政治體制と、他の一方に於ては國防國家に於ける政治指導の正當なる役割を確保し、軍指導及び統帥と政治との完き調和統一を、可能ならしめんとする點にあることも明瞭である。

## 第二節 新體制と既成政黨

舉國政治體制の樹立と、政治指導と軍指導の調和統一の問題は、國防體制に於いて共に近接する不可分の要素とも謂ひ得べきものであり、強力政治體制なくして國防體制なく、政治統帥の合理的な調和統一なくして、國防の機能は完きを得ないが、新近衛内閣の政治にとつて最も特質的なものは、言ふ迄もなく舉國政治體制であり、近衛内閣の運命は擧げ

て、この劃期的な新政治體制の機能如何に懸かつてをり、新政治體制は近衛公の政治的生命であると謂ふも、敢へて過言ではあるまいと思はれる。

本來ならば、新しき舉國的政治機能の中樞である體制の基本機關が組織されてから、近衛公は組閣の大命を拜すべきであつたが、事情の急變によつて組閣が先きに行はるゝことになり、従つて内閣の成立後、多少の間を置かなければ、「新黨」の全貌が明かにならぬであらうが、その目的や性質の一般は、今迄すでに發表され傳へられてゐる所から推してこれを知ることが困難ではない。

この點において問題の新組織は消極的には、既存の政治體制に相對して現状打破的であり、反政黨主義を標榜するものであると共に、積極的には舉國政治體制を究局の目的とするものであることは明かであると言へよう。事實かうした性質や、目的を有するものでなければ、新體制は既存の組織に屋上屋を架するものに過ぎないものとなり、有害無益と言ふの外なく、全く現在の國家的情勢の下においては、その存在の理由を認め得ない。

されば新しき組織は、現状打破的であり、従つて反政黨主義、政黨否定主義に立脚する

ものでなければならぬが、唯だその發達の或る階段に至るまでは、たとひその目的、その主義に於いて反政黨的であるとは言へ、事實上の形式に於いては、一個の政治的結社であり黨であり、政治的集團の中の一存在に過ぎないであらう。

何となれば、既存政黨の多くは、新事態に對應して解黨するであらうが、現存する凡ての政治的結社が、洩れなく解體されることは保證し得ないのみならず、たとひ一時消滅するにしても、新たな法律の制定さるゝまでは、法制新組織と並行して政黨の結成は可能であるからだ。

特に新組織が出来ても、衆議院の方はともあれ、貴族院に於ける政治團體の如きは果して自發的に解消さるゝかは疑はしい。

故に、議會の存在を前提として出發する以上、政治と議會との調和統一を確保するがためには、議會に於て多數を獲得することを要し、これがためには、初めにおいて、衆議院においては、前黨人の大部を新黨に加入せしめ、選挙法その他の改革法の道程を努力することを必要とする。

これがこの場合に於ては、新組織は其の人的構成に於て既成政黨と多く異なる處なく、從つて内的矛盾を包有し果して強力な態度をとり得べきかは疑はしいのみならず、貴族院の反對ある場合或は更に、樞密院の反對ある場合、如何にこれを克服するか、「新黨」はその地歩を獲得せんとする第一歩に於て、色々困難に遭遇するを免れないであらう。

### 第三節 前途の障碍とその克服

就中、新組織の唯一の體制としての目的や、この目的の達成を確保するがために要する既存法制の改廢等に關聯して、その一般的性質、我が憲法との關係等に就て色々な誤解を招き易いのである。

それ故に、貴族院や樞密院等に於いての質問に依り、色々な困難を來す事なきを保し難く、從つて新組織を結成するに當つては、外國に於ける「單一政黨」の模倣に墮することなく、飽く迄も、我國情に即したものを作ることが絶対の必要條件である。

我國に於ては、所謂「獨裁」は許されない。我國に於ける指導者の力には 天皇と臣民との不可分の關係に基く、上と下とに於ける限界のあるが故に、新體制は飽く迄も大政輔翼の本質に立脚し、日本民族の世界觀、その國家觀を明瞭にし、これを基礎とするものでなければならぬ。新政治體制の性質や組織に就ては、何れ正式に公表さるゝであらうが從來傳られてゐる要綱の關する限りに於ては、組織、特に國民組織の外形は記されて居る様だが、指導中樞や指導體制の本質に於ては、何等明瞭なるものなく、いやしくも我國に必要な新たな組織を樹立せんとする限り、何はさておき、先づその固有の政治觀と指導理論を明瞭にすることが望ましい。然らずんば、折角の努力も、中途に挫折することなきを保し難い。

社會と政府との調和統一を確保するの外、新體制の基本的機能は、また政府部内——中央及び地方の行政指導——の指導並びに政治指導——行政機關及び國民指導——と統帥、戰爭遂行の現在に於ては、廣く戰爭の指導と統帥の調和統一の確保に求められなければならない。

行政機關の指導に就ては、内閣制度及び各省の配置分合、官吏制度の根本的改革、その固有性を失ひつゝある地方自治團體の再建設等要望せらるべきものは極めて多いが、これらの點はこれを略し尙ほ一言、政治と統帥の調和統一に就て希望して置きたい。

政治と統帥との調和統一の確保は、平時に於ても同様であるが、特に國家活動の緊張を加へる戰時、又は事變の際に於いて、これを確保することは極めて困難であり、これ迄の制度であつて満足な解決を與へてゐるものは存在しない。

原因は機能、制度、政治的國家的態度乃至はイデオロギーなどの諸點に互つて存在するが、これを一般的な見地からすれば、兩者の調和は二元主義的自由主義的な國家に於けるよりも全體主義的國家に於いてより可能であり、この點に於いて新政治體制が、その正しく且つ強力な機能を發揮し、これを實際に於いて示すやうになれば、兩者の機能的並びに人的關係は改善されるものと見てよい。

理想から言へば、國防國家的體制の下に於いて指導者たるべきものは、軍事並びに政治の大なる才能を有することが望ましく、同一指導者が政治指導と統帥とを併せ行ふことが

必要である。だが我國に於いては、天皇の下に於いて、國務と統帥の輔佐は分離され分權化されてゐる結果として、他の國家に於けるよりも一層困難な摩擦が生じ易く、従つて近衛公がこの點に就て、豫め軍部の了解と協力を求むるに努めてゐるのは當然である。

色々な方法が考へられ、また傳へられてゐるが、いづれも實行に於いて困難であるか、又は行はれ得ても効果を期待し得ないものが多く、結局、問題は新政治體制今後の、健全なる發達にまたざるを得ないと言ふことが適當であらう。

## 第五章 政治指導と統帥

### 第一節 自由主義的政治體制に於ける政治と

#### 統帥の性格的矛盾

倫理と本能、精神と肉體とが歴史主觀としての人間の不可分の構成要素であるやうに、政治と統帥、政治と軍事とは國家的存在の異なつた機能的側面であり、國家現象の構造における不可分の條件であつて、政治を離れて國家の軍事的鬭争なく、戦争の可能を伴はない政治は存在しない。古來、洋の東西を問はず、劍が國家統治または國家的權力の最高の象徴となつてゐるのは敢へて怪しむに足りない。されば吾々はその好むと否とに拘らず、政治と戦争の國家的宿命的關係を、肯定せざるを得ないのであつて、永久平和はつひに永久の問題であり、政治的社會的主體としての人間にとつて、戦争は「平和」の永久の手段



たる感ある歴史のアイロニーは避け難いやうにも思はれる。

斯く政治と統帥、政治と戦争とは國家的生活にとつて不可分の宿命的關係を有し、現實の政治は常に戦争の可能性を豫定し、従つてまた「國防的」ならざる政治は本來あり得ないが、なほ政治と統帥、政治と軍事的鬭争とはそれ自身において、各それぞれ別個の現象であり、別個の「法則」によつて支配される對象である。この結果として政治の内在的見地に基いて、軍事を判断し、統帥または軍事的行動を支配せんとし、統帥に代ふるに政治を以てしようとするこの誤りであり、國家的存在を危くする所以であると共に逆に、軍事上の見地、統帥の内在的見地に基いて、政治上の現象を判断し左右しようとするこの危険なることもまた明かであつて、兩者の越境的な行動は、その相互的歪曲と變質化を齎らし、その結果は、最悪の場合においては、國家的に收拾することの出来ない事態を招來することなきを保し難い。

それであるから、政治と統帥、政治と軍事的指導とが、各その固有の機能を發揮し、兩者が國家的全部の目的のために、個々の客觀的事態に應じて適宜綜合せられ、調和と統一

とを確保することは、國家の有機的存在と、その健全なる發達のために缺くべからざる條件であるが、しかもこれが實現と確保とは近代の國家的實在の下においては、何れの國においても極めて困難なる問題であり、問題の解決は獨り、ワシントン、クロムウエル、ナポレオン、フリードリッヒ大王、ムスターファ、ケマルパシャ、ヒットラー、ムッソリーニ等の政治軍事の天才的才能を有する人によつてのみ可能な、一種の歴史の謎のごとくに考へられてゐる。

こゝに政治と統帥、政治的行動と軍事的行動の相剋摩擦を、一々實例を擧げて論證することは避けるが、兩者の相剋摩擦の現象が、近代の國家的組織の下において、ほとんど宿命的事であることは、斯くのごとき政治と統帥の軌轢が普遍的現象であり、兵權乃至統帥に關する國法上の組織型態や、國體の如何に關はりなく存在し、見出さるゝ現象に徴しても明かである。

蓋し近代國家における兵權の憲法上の組織、従つて統帥と政治との關係に關する法制上の機構は、之れを基本的に觀れば一方においては、主として高度議會主義の國家において

見出される政主兵従主義すなはち狹義の立憲的組織と、他の一方においては、曾つてドイツ、オースタリー、ハンガリー、一九三五年以來のポーランド、イタリーによる併合前のアルバニア等において行はれ、また現在においては歐洲ではハンガリー、東亞においては我國において行はれてゐる兵權獨立主義の組織の二の型に分れてゐるが、政治と統帥の相剋摩擦は、是ら憲法上の組織の如何に關係なく現はれ、従つて一方においては高度議會主義的な政主兵従主義のイギリス、フランス、ベルギーを始め、その他の自由民主主義的國家において平時戦時を通じて存在すると共に、また反對に兵權獨立の主義を採る我國を始め、他の前記の諸國においても極めて廣く知られてゐる顯著な事實であるからだ。

## 第二節 政治精神と軍精神の個性

然らば、既に言及したやうな近代の政治的國家的體制の下に、國體や政體の如何を問はず、君主國であると共和國であると、將た直接民主政の國であると、代議政の高度議會主

義又は官僚主義の國家であることに拘りなく、程度の相違こそあれ、ほとんど普遍的に見出される政治と統帥の相剋摩擦の現象は、果して何に由來し如何なる點にその基本的原因を有するものであらうか。個々の國家または個々の摩擦現象に、特殊または個別的な事情は別とし、専ら典型的一般的な原因について觀るならば、問題の現象は一方において國家的な存在そのものに伴ふ普遍的現象でなく、主として、政治と統帥とが單にその機構の客觀的、並びに機能的側面においてのみならず、その人的要素においても、分化するに至つた近代の立憲的國家において存し、従つて文武の國家的機能、人的結合の状態においては存しなかつた現象である事に注意されなければならない。と同時にまた一方においては、近代の國家的機構の下において、その直接の一般的原因は主に組織としての軍そのものゝ性質と自由主義的な立憲體制が有する一般的性質の、相互的背反矛盾の傾向にあるものなる點に注意されなければならない。略言すれば問題の現象は、自由主義的政治體制の性格と、軍の固有の性格との異質性に由來するものに外ならない。

蓋し廣く知られてゐるやうに、近代的國家體制の根底に横たはつてゐる自由主義的イデ

オロギーは、實在の個人ではなく自由平等の完結的な空想の個人觀に出發し、斯くのごとき個人人格に至上の價値を認め、従つて國家を以て斯くのごとき個人に對する奉仕從屬の機能たらしめ、この奉仕功利の機能の範圍内においてのみ國家を肯定しようとする。理智や自由の表徴とみなされる精神、法則、言論說得、社會、私生活、契約、競争、經濟等に重きをおき、これに反して權力、國家、政治、紀律、權威、命令、身分等に對して本來消極的否定的で、強度の反感と嫉視の態度を採り、前者の合理主義的人格主義的な範疇によつて、後者の非合理的な實在的現象を規制、克服し、これを中立化し、無害無抵抗ならしめようとする。不可侵的前提的な權利章典に出發し、權力分立やこれに伴ふ大臣責任制度の實現による、權力的政治的現象を「社會」または「國民」代表の選良が、議會の公開の席上において、甲乙論駁の合理的な政治眞理發見の辯證法的過程によつて到達した、最高最強の主權的法律の完き支配と統制下に置き、以て個人の自由や平等を保護し得べしと信する「法治主義」のイデオロギーのごとき、正に斯くのごとき自由主義的思想の典型的表現に外ならない。

現代においては斯くのごとき十九世紀的な合理主義的機構が、無名無責任なる強力な社會的集團的な多元的勢力の發生によつて一個のカラクリとなり「國民代表」の議會制度による國家權力の對「社會」的解放は、法治主義の美名の下に金力や暴力の權力政治を可能ならしめ、個人を保護し權力現象を合理化するために考案された法治機構が、反對に無力なる個人を、貪慾殘忍な金權や、無産者階級的獨裁の唯物的勢力の犠牲たらしめてゐることは周知の事實である。が、それはともあれ自由主義的イデオロギーが、反權威的、相對的、個人主義的であり、嚴格な紀律や服従を嫌惡し、犠牲心に乏しく、功利的自我的なる結果として、一般に軍の本質的個性に相反する傾向のあることは極めて明瞭であらう。蓋し如何なる國においても、軍隊はその使命の本質上「絶対的」であり、全體的「主權的」であつて、全人格的な「無條件」的服従、絶対の忠誠と峻嚴なる紀律を要求し、生命の犠牲をも要求することは、軍の存在に伴ふ、謂はゞ一種の自然法的な現象といつても、必ずしも過言ではないからである。

されば軍の組織上前提とする國家的政治的精神と軍の直接の精神の差は、自由主義的政

治精神と、反自由主義的全體主義的政治精神の相異に準じて、比較せられ得べきものであつて、近代國家體制はその一般的精神においては、個人の國權によつて侵されない自由と平等とを要求し、この點において合理的形式的であり、反權威的でもあり、その人間觀において樂觀主義的でもあるに反し、軍はその仕事の性質上、直接の精神において權威を尊び、榮光を精神とし、威力的であり、討論や審議を許さず、寡頭的であり、迅速かつ絶對の服従と犠牲の精神とを要求する。

故に軍の精神はまた、その基本的態度において現實的であり、非合理的直觀的であり、その人間觀において悲觀的な傾向を有すると言へよう。斯くのごとき精神の相違は、程度の相違こそあれ、何れの國においても見出さるゝところで、この點において政治人と軍人、政府と軍部の對立的摩擦的傾向は、組織それ自體の有する性格または精神の相違の現れとして、一般に自然であり、避け難い現象であるといはなければならぬ。

### 第三節 反政黨主義的政治體制に於ける政治と

#### 統帥の性格的共同性

自由主義はこれを知識社會學的に觀れば、知識と財産の有閑層であるブルジョアのイデオロギーであり、知的並びに經濟的には獨立するが、政治的には未だ解放されてゐなかつた「市民」層の合理主義的でもあり、また經濟的、富本位でもある國家解釋、政治解釋として發生したものであることは、廣く知られてゐることである。

自由主義は客觀的には共同である世界をイデオロギー的に獨占視し、「我々の意識」を豫定する自我の意識を唯我、絶對化した非實在的な空想の世界や個人觀に出發し、斯くのごとき架空の概念方式によつて、國家實在を規制し解釋しようとするものであるから、自由主義の政治體制が、解くべからざる矛盾や偽瞞に終始せざるを得ないのは當然である。

すでに前に部分的に言及して置いたやうに、本來個人を保護し、不合理な權力現象を合理化するために考案された筈の法治機構が、逆に個人を殘忍貪慾な資本力や無産者階級の

唯物主義的獨裁の犠牲たらしめ、法治主義の合理主義的生命とも謂ふべき討論と説得の議會主義機構、すなはち盲目的な力の量による政治ではなく、社會監視の公開の席上における甲乙論駁の辯證法的過程によつて、政治真理の發見を可能ならしめようとする「選良」の代議機構が、多黨的勢力やこれを操縦する背後の多元的社會的勢力の惡質の取引、妥協、またはその相互的抗争によつて、一個の喜劇的カラクリにすぎないものとなつてゐる感があるのは、最も明かに十九世紀的政治體制の矛盾や、擬裝性を曝露するものに外ならない。

前項の論稿において指摘して置いた、近代國家における政治と統帥の性格的異質性、並びにこれに基く兩者の自然的一般的な相剋摩擦の傾向も、また前述のやうな近代國家に普遍なる自由主義的政治體制に内在する宿命的、悲劇的な矛盾や擬制の一つの現はれであり、その存在的に最も重要であり、決定的な意味を持つ政治と戦争、政略と軍略の指導關聯區域における致命的とも言はれ得べき表現である。こゝに傳統的國家體制における政治と統帥の性格的矛盾、並びにこれに基く兩者の反抗、相剋の傾向を以つて、致命の宿命的痼疾であるといふのは、斯くのごとき政治と統帥の性格の矛盾は、イデオロギー的であり、技

巧的な自由主義そのものに基くものであり、従つて自由主義體制に内在する性質であつて政治と統帥の性格並びに機能の調和統一は、自由主義政治體制そのものゝ否定を外にしては、基本的に不可能ならざるを得ないからである。

勿論單に形式的な見地からすれば、政治と統帥の性格的調和統一は、自由主義に外在的な見地からではなく、内在的な見地からも不可能ではない。軍の精神および組織機能の徹底的な自由主義化は、すなはちそれである。實際においても、自由主義的革命が軍隊の手によつて遂行された直後や、「理論的」な自由主義的革命等の場合においてしばしば見られる現象であつて、古くはイギリスの清教徒革命におけるクロムウェルの軍隊、佛蘭西革命時代の共和憲法の下における試み、及び近くはボルシェビキ革命は別としても一九一八年におけるドイツの兵士及び労働者革命に基く軍の組織等はその典型的な例であり、何れも軍の内部における上官選舉主義の採用や、軍人に對する參政權の賦與は勿論、高度の市民的自由權の承認保證等によつて軍の自由主義的性格化を行つた。

だが、斯くのごとき軍の「政治」化や「市民」化が、軍の變質と解體を意味するもので

あり、また國家獨立の基礎を危くするものであることは言ふまでもなく、従つて戦争の可能性を伴ふ國家生活の實在、國防の存在的不可避性は軍の本質復歸を必然的ならしめ、軍の「政治」化をして一時の變態的中間的現象たらしめるのは自然である。ゆゑに自由主義政治體制の維持せらるゝ限り、軍部と政府、統帥と政治との性格の對立矛盾は避け難いことであつて、兩者の調和統一、その國家的全部の自然的客觀的體系における本然的融合はたゞ部分的であり、擬似的なるに過ぎない自由主義的政治觀や、これに基く體制を一掃し廢棄することによつてのみ可能であるといはなければならぬ。

これを積極的に言ひ換へれば、近代國家の謎である政治と統帥の調和統一は、反自由主義的政治體制である全體主義的、唯一政治指導體制の下においてのみ解き得べきであり、凡ての點において二元的であり、孤立と抽象に終始する自由主義のヤヌスのな構想や體制を清算し、世界及び國家の正しき存在解釋に即した政治と統帥の有機的、一元的な國防國家體制の下においてのみ初めて可能であるのだ。

#### 第四節 翼賛體制に於ける政治指導と統帥權の獨立

されば反政黨主義の全體主義唯一政治指導體制は、政治と統帥の調和統一に對して、その本然の體系的基礎を與へるものと謂へる。之れ蓋し反政黨主義の唯一政治體制は政治をその統帥、隨つてまた戦争に對する國家的構成の有機的な關係から、イデオロギー的に不自然に分離抽象し、これを變質化する自由主義的精神と體制を克服止揚し、政治をばその戦争に對する不可避現實の關係において理解し、國防國家の理念に基いて生活と機構を統一かつ有機的に再規制し、再組織しようとするものであるからだ。國防國家が全體主義體制の王冠であるといはれてゐるのは、この理由によるものである。故に現代の全體主義的國家體制が、自由主義の用語を藉りていへば、著しく「軍隊的」であり「獨裁的」であることは自然であると共に、一方においてはまた、政治と統帥とが、この新たな現代的國家生活形式の下においては、相互に了解し難い性格の法に基く形式的な寄合でなく、互にそ

の精神と基本的機構を共同する國民的創造と防衛の、不可分の有機的機能に外ならないことも當然である。

言ふまでもなく、現代の全體主義的政治體制は、之れを發生的に言へば、戦線における生死を超越した協同の體驗と、現代における總力戰の經驗に基き、國防、随つて政治と軍事の體驗と、偉大な才能を有する優れた倫理と、知性の指導者とその同志により、激烈な闘争と計畫的な國民指導とにより、はじめて確立されたものであつて、唯一政治體制の下における、政治と統帥の調和統一の可能性は、この故に發生的、心理的にも明瞭に理解される。

それであるから、我國においても米内内閣の辭職に次ぐ近衛内閣の成立に由り、いよいよ急速に具體化の過程に入つた新政治體制に基き、新たに現代的な高度國防國家の政治指導體制が實現せらるる場合においては、政治と統帥とはその本然の有機的、體系的な調和統一を保持するに至るであらうし、また兩者の妥當健全なる統一融和によつてのみ眞の國防國家體制は存在し得られる。

勿論、新政治體制が、わが皇道主義の固有の國情と、目下の急迫した國家内外の客觀的情勢の下に、朝野の協力によつて急速順調に樹立ざるゝにしても、新らしき指導體制がその正しき精神と目的を機能において實證し、國民及び文武國家諸機關の國防國家的有機體系化を、謂はゞ性格化するがためには、前途なほ革命的な努力を必要とし、目的の急速な達成は期待し難いと言はざるを得ない。何となれば、いはゆる強力政治體制樹立の過程、その「唯一」政治指導體制としての事實上、または法律上の確立形式は國によつてかならずしも同一ではなく、中にはトルコの場合におけるやうに、變形的なものもあるが、從來の現象の關する限りにおいては、概ね極めて卓越した首領の率ゐる反政黨主義の小數黨が多年に亘る決死革命的闘争の結果勝ち獲たものである。故に指導者は、挺身決死闘争の試煉によつて、すでに實證された卓越した指導能力と、新たなる世界觀並びに明確、かつ適切なプログラムを持つて居り、政權の掌握と共に之れを實施し得るのであるから、唯一體制の樹立は、すなはちその機能の確實かつ迅速な發揮を擔保するものに外ならない。運動の正當性を合法化する立法を初め、憲法の改正、國家および國民新機構の設定、その他そ

の政策の確實な施行実績を挙げ得るのは、此故に當然であると言へる。

所が、わが國の場合においては、その優れた國情と既成諸勢力の敏捷性にもよるものであらうとはいへ、新政治體制は下からの鬭争的、自然的な發生形式を採らず、既存諸勢力の近衛公の意を迎へた自主的、發展的清算の誘導形式により齎らされた歸納的、分析的な結果であり、革命的鬭争の動態と、これに伴なふ創造性を著しく缺いて居り、特に米内内閣の辭職に由る、急激な情勢の變化では、新體制の精神と組織とは引き離され、精神よりも體軀が先に現はれ、精神の實質上、諸勢力の持寄りによつて、後から形成される月足らず誕生の模様にも見える。故に充分の準備と試煉のない新體制誕生早々、幾多の矛盾と障害に直面すべきことは、想像に困難でなく、この點は新體制がその機能の發揮を確保するために改廢を要する法律上の制度との關係において著しく、政治と統帥との調和統一に關しては、兵權獨立の諸法制との關係において現はれるであらう。

## 第五節 國防國家體制と國防に於ける形式的二元主義的觀念の止揚

わが國情に基く眞に強力妥當な新政治體制が確立さるゝ場合においては、その體制と機能とを將來に向つて確保するがためには、消極的にも種々新たなる法的機構並びに施設を要することは言ふまでもなく、之れがためには憲法附屬の法令のみならず、進んでは將來適當な時期に於いて、憲法條項改正の奏議をも必要とするであらう。なんとすれば、現行の憲法はわが國情を基礎としたものであることは勿論であるが、同時に又十九世紀的な外來要素を包有するものであることも否定し得ない事實であり、歐米自由主義の舶來的影響を一掃する事なくしては、皇道主義的超人格主義の世界觀に基く、大政輔翼の強力かつ有責の政治指導體制は、擬制や妥協に墮し、國務と統治の權威を毀損するを免れないからである。議會、大臣、樞密顧問、第二章の權利保證の規定等を中心とする關係各條項の改正増補は、此關係において考慮さるべき問題であらう。が、それはともあれ、新政治體制



が眞價を發揮し、組織と運動とが安定の域に到達する場合には、兵權に關する現行の法制の一部は、その意義を變ずるか、または少くとも政治と統帥の國防國家的な體系的關係を確保するため、個々の點において、法規の改廢が考慮されることになるであらう。

蓋し、之れを消極的な側から言へば、統帥權の獨立は統帥の純正と、その技術的能率を尊重し確保するの意義においては維持され、認められなければならない當然自明の原則であるが、この原則の實在の法制の形式と範圍におけるが如き確保は、部分的には自由主義的諸勢力の存立を前提として意義を有するものがあり、政權が國家的、社會的な動搖不定なる自由主義的勢力に解放せられ、または少くともその干涉統制の下に置かるゝ政黨政治體制の場合において、この種勢力による兵權の利用または兵權に對する干涉を防止し、これを不可能ならしむるがために、その存在の意義を有し、採用されたものがある。

略言すれば、兵權獨立の制度は皇道主義のわが基本國情と相對して 天皇の統帥大權とその純正を確保し、防衛する機構として、歴史的意義を有するものであるから、すでに自由主義的多黨的な政治體制が廢棄され、これに代つて反政黨主義の皇道國家的政治體制が

確立された場合においては、兵權獨立の制度は、その抗争の現實的なを失ひ、少くともその對自由主義的な歴史的意義は之を失ふ事になるであらう。さらに積極的には、新政治指導體制であつて、眞に反政黨主義的體制であり、またわが民族の世界觀に基く、皇道主義的超人格主義の國防國家的唯一政治指導體制であるとすれば、政治と統帥とは等しく 天皇の御統治の現はれとして、その精神と基本的態度において自同的であり、對立や背反を許されないものであるから、統帥と政治の性格的異質觀や、その相剋性を前提とするが如き歴史的制度は、政治と統帥の國防體系における有機的調和統一の概念と兩立せず、眞の強力な、隨つてまた合理的、計畫的な指導體制は、斯くの如き統一の確保においてのみ、國防體制の王冠を獲得し得るものと言はなければならぬ。

斯くの如く眞の強力なる唯一指導體制の下においては、政治と統帥とは國防國家的、體系的調整統一を獲得するが故に、統帥權の獨立に關する諸制度であつて、非國防國家的な謂はゆる、十九世紀的政治體制を前提とする部分の關する限りにおいては、存續の意義を失ひ、または改廢せらるべきは當然である。だがそれは眞の國防國家體制的實現せられ確

保せらるゝ場合においてのみであつて、近く生れんとする新政治體制が、斯くの如き理想の状態に急速に到達し得るものとは私は考へない。

蓋し近衛公を中心として、近く構成さるべき新政治體制は、すでに言及したやうにその成立過程の性質からいつて、多くの矛盾を包有し、強力體制としての純血性に乏しく、新體制をして、強靱なものならしむるためには、前途なほ相當の年月を要するであらうからだ。されば新政治體制が成立し、近衛公が指導者として内閣を組織するにしても、直に新體制が指向するが如き政治と統帥の調和統一が確保されるものとは考へられないが、朝野多年の要望により、新體制が成立し、近衛公が責任者として内閣の首班となる以上、萬難を排しても決定的な國防上の調整と統一を可能ならしめるに必要な努力をなす事は特に望ましいと言はなければならぬ。

此點において、特に考慮されてよいと思はれるものは、他の大臣は別とし、總理大臣のみは國防の統一調整の必要上、ある範圍内において事前に統帥においても軍部大臣の協議を受けしむるものとし、これを可能ならしむるため總理大臣は特旨により現役の陸軍大將

及び海軍大將に任せらるゝものとする事である。もちろん前例になく、技術的には相當の困難もあるであらうが、眞に現代的な國防國家體制を樹立せんとするがためには、此種の改革は斷行されることが必要であらう。

之れがためには、内閣制度の基本的改革を必要とすることは勿論であるが、何れにしても新政治體制が國防國家的指導體制としての精神と機能とを發揮し、その將來の堅實な發達が見透される場合において可能である。總理および軍部大臣を以てする事實上の國防委員會や、國防御前會議にひとしい總理大臣の軍部大臣、帷幄上奏における侍立等も考へられるが、侍立主義は、效果少く随つて差當り經過的な方法としては、連絡會議主義の採用が考慮さるゝことになるのではあるまいかと思ふ。

## 第六章 翼賛體制と行政の指導

### 第一節 翼賛體制の世界政策的前提

近衛公の決意と努力を中心として可能ならしめらるべき新政治體制の目的とする處は、五・一五事件や滿洲帝國建設以來の歴史的課題である我國體の本義と、肇國の精神とに基く國防國家體制の建設を可能ならしめ、鐵壁の如き一君萬民、舉國一體の體軀と其無盡のエネルギー、並びに民族文化の最高精神と練達の技能を以て、事變の速なる完遂と東亞新秩序の建設を確保し、以て今次歐洲の大戦を序幕として展開さるべき一切の世界的變革に對し、東亞新秩序を中核とする我が世界政策に不動不可侵の地歩を得せしめんとする事にある。

今や獨伊樞軸の勝利に依つて樹立されんとして居る歐洲の新秩序は、其影響する處に於て歐洲にのみ止らざるべき事は言ふまでもなく、随つて我國は差當り此點を考慮に入れて我が東亞政策の自主獨立性を確保擴張するに備へなければならぬが、唯歐洲の新秩序國家群が現状維持國家群を敵として有する間は、我國の地位は軍事的にも外交的にも之れを確保する事に於て比較的困難ではない。問題は新秩序國家群が現状維持國家群との第二第三の決戦に依り、又は妥協に依り最早闘ふべき敵を歐米の中に有せざるに至るか、若しくは何れの特定國を中心とするを問はず、歐米の國家群が内部闘争を止め、力の伸張を一體となつて東亞に向けんとする場合である。勿論斯くの如き事態が今急に來るものとは考へられないが、今後數次の決戦を経て五十年又は百年の内に來ないとは保證が出來ないであらう。

東亞政策を中核とする我が世界政策は斯くの如き事態に對しても、東亞の不可侵を確保するを得べからしめるものでなければならぬ。我國の欲する處は悲慘な世界的決戦ではなく、東亞の固き平和であり、凡ての個人、國民、凡ての人種の相互的尊敬に基く友誼で

あり安居樂業である。だが八紘一宇、「世界一家族」の理想を他より侵されない様にするがためには、我國は飽く迄も正しく且つ強力で無ければならない事は言ふまでもなく、東亞の建設に乗出した我國は、其歴史的责任からしても百年の大計を樹て、今に於いて將來の變革に備ふべき萬全の策を講じなければならない。

我國は明治維新の改革に依つて、一躍近代的國家體制を整へ、憲法の制度を経て世界史上、其例を見ない躍進を遂げたが、我が國民の巨大なる精神的包容力と進取邁進の消化能力とに基く數世紀を壓縮した様な感ある目まぐるしい我が歴史的發展は、七十有餘年にして茲に再び創造のための革新を必要ならしめ、我國は今や世界變革の嵐を前にして無窮の皇冠を扶翼し、また日本民族の世界的興隆發展を確保するため、體制更新の歴史的決斷をなすの必要に迫られて居るのだ。新しき政治體制の確立と、之に伴はるべき國防國家體制の建設とは、即ち今後數世紀又は少くとも百年の間、我が國家的民族的使命の達成を確保するに足るべき世界政策の最小限度の對内的、組織的條件であり、側面であつて、我々は皇謨を翼賛するがため、亦我々の子孫の日本臣民としての光輝ある生存、其繁榮幸福を

確保するがためにも和衷協同犠牲を忍び、行きがかりを捨て一體となつて新體制に協力し其健全なる發達を期すべき義務がある。

## 第二節 翼賛體制と國家機構及び國民生活の有機的統一

新政治體制が其國防國家的な強力なる指導機能を發揮するがためには、消極的には國家及び國民生活の領域に於ける一切の自由民主主義的精神や其他一切の背反分離相剋の反國家的要素を克服清掃するを要すると共に、更らに積極的には我が國情の本質である皇道主義的超人格主義の理念に基く正しき指導に依つて、國民全體の和衷協同を可能ならしめ、國民總力の最も合理的效果的な綜合と發揮の國防國家的組織を確立しなければならぬ。此結果として、國民生活の領域に於ては、新政治體制の組織化的機能は經濟及び文化の國防國家的編成となつて現はれ、其國家的有機化又は同じことであるが、其全體、隨つて戰爭の可能性を伴ふ政治への從屬化（それは經濟や文化の消滅や抹殺で固よりなく、其固有性を前提

としての全體のための部員であり、經濟や文化の國家的給付を意味するものに外ならない」となつて現はれる。故に前者の區域に於ては、經濟の原理は營利でなく、基本的に給付に求めらるべく、經濟の意義は個人の物質的繁榮にあるのではなく全體の創造的繁榮のためにする職能的寄與の満足に求められなければならない。

自由と全體として無計畫は高度の統制と計畫指導に依りて合理化される事を必要とし、經濟に新たな性格を持たせなければならぬが、其程度と區域とには緩急伸縮宜しきを得る事を要し、單に個人の創意を抹殺するに止るが如き機械的統制の無意味である事は言ふ迄もない。宗教、學問、技藝も其世界觀的前提を日本民族のそれに置く事を要し、國家的全體の爲に寄與すべく、少くとも國情に反するものであつてはならない。新政治體制の下に於ては、知性は尊重されても「知識人」としては無用又は有害視さるゝ傾があつた「文化人」は批評のための批判的態度や、單なる觀察者としての態度を捨て、明瞭な國家的性格の下に國家的創造作業の責任ある一員として行動の内在的見地に立脚し、各職能を通じ積極的に寄與しなければならない。斯くしてこそ生活から遊離し、全體から孤立して其權

威と指導力を失つた學問や教育は其權威や指導力を回復する事が出來、大學其他の教育機關は、指導者養成の機能を發揮し得るであらう。

既存の國家的機構の領域に於て現はれる新政治體制の機能は、主として立法及び行政に關するものである。立法機關に關聯しては、新政治體制は傳統的な多黨主義、並に其前提となつて居る自由民主主義を否定し、専ら我民族の世界觀國家觀を基礎とする舉國「黨」を以て從來の政黨に置き代へなければならない。此結果として、新しき議會の運用體制の機能を確保するがためには、選舉法を始め議院法の改正等を差し當り必要とするであらうが、此點に關する諸問題は新政治體制と立法又は議會の關係に關する問題であつて、論ずべき問題も多いが、茲では觀察を行政の區域に關する問題に限らざるを得ない。

### 第三節 翼賛體制と二元主義的行政精神の克服

政治と統帥とが國家的存在に於ける不可分の機能的側面であることは前述したが、之が

調和と統一とは國家其ものゝ維持と健全なる發達のために缺くべからざる條件であるにも拘はらず、何れの國に於ても此目的の達成が極めて困難である様に、行政と國民の生活、又は其現はれとしての政治との調和統一は、國家の有機的存在に缺く事の出来ない條件であるが、而も實際に於ては、調和統一は常に困難なる問題であり、兩者の相剋と摩擦とは如何なる機構や指導を以ても避け得ない國家的存在其のものに伴ふ宿命的な現象であるが如くに思はれて居る。官僚と國民、官僚と政治家、官僚主義と民衆精神、行政と國民生活等の對語が單なる對立的な概念でなく、相互背反の概念である様に考へられてゐるのは、此傾向の現はれに外ならない。

然らば、傳統的國家體制に於ける斯くの如き行政と國民生活、行政と政治又は行政精神と一般政治精神の對立背反は何に由來するか。勿論仔細に觀察すれば、原因は敢へて一二に止らないと共に、原因の中には或は一般的、普遍的なものがあり、或は個々の國家に特殊なものもあるが、後者は之を措き今主として最も一般的な性質の條件に於て言へば、第一に自由主義的イデオロギーの二元主義的構想や、斯くの如き構想を前提とする傳統的國

家體制に於ける政治の一般精神と行政の固有精神の性格的異質性、又は傾向を擧げられなければならぬ。

蓋し、近代的國家體制の前提となつて居り其歴史的基礎となつて居る自由主義は、經濟的には兎も角も、政治的にはいまだ解放されて居らなかつた富と教養の「市民」の政治的イデオロギーとして現はれたものであり、歴史的な國家的、政治的權力に反抗して起つた市民階級の政治的態度を表明するに外ならないものであつて、隨つて其國家、權力、政治、命令、支配等に對する基本的態度に於て消極的、否定的であり、自由、討論、説得、審議、法則、形式等を尊重し、反權威、反寡頭的であるが而も行政は其實在の固有な性質に於て討論、審議でなく、非合理的、行動的であり、權威、威力、寡頭的たる事を要求し、意思の迅速果敢なる決定と執行を條件とし個性とする。故に國家的實在に於ける行政の固有なる精神と、近代的國家體制の前提とする自由主義の一般的、政治的精神とは性格的に異質的、背反的傾向を有するから、自由主義的國家體制の下に於ては、一方に於ては行政權と他の一方に於ては立法權並びに司法權が代表するものと信ぜらるゝ一般國民大衆とが心理

的にも對立相剋し、行政權は議會や民衆からは嫉視反感の目を以て見られ、其權力は立法強力性並びに留保等の工作や立法權の前衛である司法權の獨立等を始め、また行政權の内部に於ては大臣を始め一般官吏の責任の原則、合議制、分權制等の機構的諸原則の採用に依つて、狭く制限せられ、行政權は「法律の授權に基かざる何事をも執行せざるの原則」が認めらるゝと共に、行政權はまた自らの官僚化、事務層の恒久化、専門化に依つて排他獨占的な防禦機構を構成し、自ら知識及び技能の優越者として議會や大衆的勢力を退け、之を劣等視する傾があるのは自然である。

故にまた此後の點に關聯して、第二に行政の官僚主義を摩擦相剋の原因として擧げられなければならぬ。勿論官僚主義其ものは必ずしも傳統的國家體制に内在的なものとは言へないが、事實上此體制の下に發生した現象であるのみならず、少くとも官僚主義の或種の表現形式、例へば執務の形式主義や之に伴ふ能率の低下、責任感の稀薄等は法治主義に内在する行政權に對する高度の嫉視反感や合理主義的法制の側面的現象であつて、一方に於て政治と行政の性格的異質性に基く相剋背反の傾向の現はれであると共に他の一方に於

てはまた兩者の相剋摩擦を更に激化する現象でもある。

斯くの如くに行政と政治、行政と國民生活の對立、背反の傾向は二元主義的な自由主義並びに之に基く國家的體制に内在的な傾向であり、自由主義的構想や體制の有する矛盾の現はれとも謂ひ得べき現象であり、之が清掃は自由主義的イデオロギーや之に基く體制を清算し、反自由主義的運動や體制の確立に依つて始めて可能である。

其消極的側面に於ては、反自由民主主義であり、積極的側面に於ては皇道主義的全體主義である新政治體制は此目的に應ずる所以であつて、從來の誤れる舶來的要素を清算し、我が國體や國情に基礎を置く皇護翼贊の舉國政治體制は、自由民主主義的イデオロギーや機構に依つて國民生活から分離され形式化して活力を失ふに至つた行政機構を我が國情に基く正しき指導原理に依つて、國民生活に結び付け、之を有機的ならしめなければならぬ。新たなる官吏教育に依る吏道精神の確立、官吏制度の根本的改革、内閣制度を始め、中央、地方行政機構の改革、地方自治制度の更新等は新政治體制の行政指導に關する機能

就ては論ずべき事柄も極めて多いが、他の機會に譲らざるを得ないが、以上各種の機構的改革の中、行政内部の最高指導を確保するために最も重要視され、多年の課題である國務大臣と行政長官の分離問題は、法制的にも行政技術的にも決して一般に考へられて居る様に不可能でなく、國務大臣から行政長官に對する直接の行政指導權を奪ふことなくして、而も大臣と行政長官を分離することの憲法上、可能なる事に一言言及して置きたい。

## 第七章 翼賛體制と統帥權

### 第一節 多黨主義的政治體制に於ける政治と

#### 統帥相剋の準宿命的性質

政治と鬭爭、政治的鬭爭と戰爭乃至軍事的鬭爭とは國家的存在に於ける謂はゞ楯の兩面であつて、精神と肉體、倫理と本能とが人間の存在の不可分の要素であると同様に、國家的存在の構成的條件を成すものと言ひ得る。フォン・クラウゼウィツが戰爭を以て手段を異にする政治であると言つたのもまたこの基礎思想に立脚するものであつて、古來武器が國家的權力又は王位の象徴となつてゐるのは此故に自然であると言はなければならぬ。されば政治と統帥、政治又は外交上の活動と戰爭とが國家的全部的目的のために相互に調和統一せられ、兩者が國家の有機的、體系的存在の内部に於て有する其固有の機能を發



揮すべきことは、國家の防禦とその發展のために缺くべからざる條件であるが、しかも傳統的な自由主義的、多黨主義的政治體制の實在に於ては、政治と統帥の關係に關して、狹義の立憲主義又は兵權獨立主義の何れの立法上の主義を採るにせよ、國家的存在にとつて最も重大な關係を有するこの政治と統帥の調和統一は、政治體制上寧ろ偶然であり、奇蹟的にのみ可能であつて、政治と統帥とは自由主義的な傳統的な政治體制の下に於ては相剋と摩擦の宿命的關係を有するものゝ如くに見受けられる。

蓋し是まで軍事及び政治の専門家の間に於て政治と統帥の調和統一を可能ならしむるがために、最も合理的な憲法上の體制と看做されてゐるのは君主制の組織（兵權に關する憲法の主義の如何によつて國家元首主義もあれば、或は大元帥主義の組織もあるが）並びに共和制の國では君主制に模範を採つた大統領——勿論大統領の統帥に關する指導權を禁止しない場合に限られるが——の制である。就中君主は自由民主的な大統領などの場合とは異つて、幼時から軍事及び政治の特別の教育及び訓練を受けられるので、君主は決して單なる形式的機械的な統一者ではなく、其崇高な地位及び責任と相俟つて最も適はしい實質的な軍事及

び政治の指導統一者であると考へられてゐる。

だが、之は單に比較的一般的な觀察であるに止まつて、君主制必ずしも問題の困難を一掃する所以でない事は、君主國に於ける軍事と政治の相剋摩擦の明確な現象の實在が之を立證してゐる。此點は特にプロイセン、ドイツ帝國等に於ける古くはビスマルク對モルトケ、後にはビ公の引退後に於ける宰相と歴代參謀總長との軋轢に徴しても、一般を知る事が出来るが、例を外國に求むる迄もなく、我が國に於ける現象が最も明かに之を物語るものと謂へよう。

政治と統帥の調和と統一の確保が從來歴史の謎の如く思はれ、唯だナポレオン、ヒットラー、ケマルパシヤ等の政治軍事の天才の出現によつてのみ可能だと考へられて來たのは此故に察る自然だと言ふことが出来るであらう。

## 第二節 反政黨反多黨主義的體制と政治及び 軍事の國防國家體制

一見すれば政治と統帥の以上の様な相剋摩擦は、敢へて傳統的な多黨的政治にのみ限られた現象ではなく、根柢に於て政治と統帥各機能の異質性に基く内在的現象であるが如くに思はれるが、更に一步を進めて觀察するならば斯くの如き摩擦の不健全なる現象は是ら二の機能に内在する現象ではなく、主として自由主義的イデオロギーが齎らした近代的政治體制其ものに内在する現象であつて、普遍的現象であるとは謂はれ得ないのである。

蓋し、廣く知られてゐる様に自由主義のイデオロギーは自由平等の人格主義的基本的態度の結果として、國家對社會、權力對法、政治對精神と經濟、身分又は命令對契約などの二元的解釋に出發し、國家、權力、政治、命令、身分等を罪惡視し、之を法、社會、精神、經濟等の範疇によつて克服し中性化せんとするが故に、國家遠心的であり、隨つて國家的權力と不可分の要素である軍に對しては、高度の嫉視反感を有し、軍隊的形式や生活を社

會的形式や生活によつて克服せんとすることは自然であり、軍を有害視し、隨つて一般に軍に對する同情と理解を缺くが故に、國家的機構の内部に於ても軍と政府と軍事的要素と文治的要素の間に摩擦の歴史的並びに心理的傾向を有することは當然となるからである。故に斯くの如き相剋摩擦の關係が、手段のミリタリズムではなくて、ミリタリズムは性格的、意向的になつてゐたドイツ諸國に於ても等しく存在し、歴史的な王權的軍事的勢力と新興のブルジョアの自由主義的議會勢力や、官僚との間に於て強い形式に於て存在したことも自然である。

故に、また消極的には反自由主義的であり、傳統的政治體制に對して否定的態度をとり、積極的に謂はゆる全體主義的である唯一體制のもとに於ては、斯くの如き統帥と政治の相剋摩擦のあり得ないことは自然である。

何となれば、唯一體制のもとに於ては軍と民間、軍と政府の對立なく、兩者はともに合一世界觀的共同體の要素としてのみ存在するからである。眞の唯一的指導體制は、國民の協力と國家機關の指導とによつて、斯くの如き非有機的反國防的對立現象を一掃すること

を目的とし、また一掃することによつて唯一體制として王冠を獲取することが出来る。此故にドイツに於てはもとよりイタリーに於てもトルコ、ポルトガル、スペイン等に於ても政治と統帥とが、その本然の有機的調和統一を保持し、傳統的な對立や相剋のあることを聞かないのは寧ろ自然であると言ひ得よう。

### 第三節 わが新政治體制と統帥及び政治調和の 可能性の問題

我國に於ても、新政治體制が樹立される場合、國家的機構の統一的指導に關聯して、統帥權の獨立が問題視されてゐるのは自然であるが、新體制であつて眞に純粹なものであるならば、問題の融和統一は自然に確立されるであらうし、隨つてまた、之を確保すべき制度上の改革も必ずしも困難ではないであらう。故に問題は専ら新政治體制の性格、特に最高指導者の人物如何にあると言ふべく、正しい眞の統一調和は、高い軍事的理解、政治的並びに思想的な獨創性を有する指導者のもとに於て容易であるが、私は問題の體制に對し

ては目下のところでは純眞性を期待することを困難と信ずるがゆゑに、機構的改革に就ていろいろ考へられるが、差當り具體的に之を論ずることは時期尙早であると考へる。

## 第八章 國防國家體制の確立に於ける 政府と軍部の責任

112

### 第一節 國防に於ける政治と統帥の調和並びに その條件

政治と統帥、政治と軍事とは國家的存在の異つた機能的側面で、政治を離れて國家の軍事的鬭争なく戦争の可能性を伴はない政治は存在しない。故に政治と統帥、政治と軍事的指導とが各々その固有の機能を發揮し、兩者が國家的全部の目的のために個々の事態に應じ、適宜綜合せられ、調和と統一を保持すべきことは、國家の存在とその健全な發達のため缺くことの出来ない條件である。而も斯くの如き健全な有機的關係の實現と確保は近代の國家的實在のもとに於ては、極めて困難なる困難とみなされてをり、それは唯だ偉大な軍事的政治的天才の指導下に於てのみ解決の可能な問題だと考へられてゐる。されば政治

と統帥の妥當な機構的並びに機能的關係を保持することは、何れの國家に於ても最も重大であり且つ困難な問題であるが、特に我國の如くに、軍が特殊且つ強大な地位と勢力をもつ國家に於ては、最も基本的な意義を有する問題であつて、國防國家の建設を目的とする新政治體制の確立は、この問題に對する或る程度の解決を外にしては不可能ならざるを得ず、新政治體制もその意味をなさぬものと言はなければならぬ。

### 第二節 世界觀的條件

然らば政治と統帥の妥當なる關係を保持するがためには、如何なる條件を必要とするか。此點に就ては基本的には凡そ三の條件を擧げることが出來よう。即ちその一は精神的世界觀的條件であり、その二は人的條件、而してその三は機構的組織的條件である。第一に政治と統帥の國防國家的體系化を確保し、兩者の健全妥當なる調和統一を保持するがためには、政治と統帥とが世界觀的に統一せられることを必要とし、傳統的國家及び國防觀念に

113

於ける統帥と政治の二元觀的政治的傾向が廢棄されなければならない。

政治と統帥とが傳統的國家組織のもとに於て、やゝもすれば相剋摩擦の關係におかれてゐたのは、部分的には傳統的國家組織の前提とする自由民主主義のイデオロギーに基くものであり、自由民主主義の内在する國家と社會、軍隊と國家の對立的二元主義的傾向とに由來するものと謂はなければならない。この傾向は議會中心主義や、多黨主義の行はれてゐた我國從來の實際のもとに於ても相當に著しく、軍部と政府を中心とする議會との摩擦並びに、これに基く國策の不統一は、主として斯くの如き國家精神的對立や、異質性の傾向に基くものといへる。されば政治と統帥の統一調和を確立するためには、新體制は第一に世界觀的統一を實現することを必要とし、一方に於ては自由民主主義的イデオロギーや共產主義的イデオロギーを排撃すると共に、他の一方に於ては日本精神に内在する超人格主義的皇道主義の世界觀にその倫理的前提をおき、以て軍と政府、政治と統帥の世界觀的融合統一に努力しなければならない。これ問題解決の最小限度の精神的思想的條件である。

### 第三節 人的條件

第二に注目せられるべき條件は人に關する條件である。從來政治と統帥の相剋摩擦は主として人の關係に由るものであると考へられて來た。勿論人の調和を得ることの必要は敢てこの領域に限られるべき問題ではなく、いづれの協同領域に於ても、等しく重要な意義を有する問題であるが、同時にまた政治は統帥の關係領域に於て特に國家的に重要な意義をもつ問題であることも多言を要しない。故に、新體制をしてその機能を發揮せしむるためには、この問題に就ても適當な解決が與へらるゝことを必要とするが、これがためには、政治と統帥並びに一般行政と軍事行政の接觸區域における人事に就ては、首腦部の人事については勿論、下級の人事についても統帥と配置の適正に努力を拂はれることを必要とする。なにかんづく政府首腦部と統帥首腦部との人事關係について、性格の調和を得るに最も注意を拂ふことを必要とする。だが問題の解決は一般的にも廣く國民に對する國防教

育の徹底と、直接には皇道精神を中心とする軍人の政治的理解、ならびに政治家や一般文官の軍事的理解を深からしむべき教育、訓練ならびに相互的自制と権限の尊重に俟たざるを得ない。特に軍の側に於ては従來の軍人精神教育のほか、新時代の事情に鑑み國防國家的政治教育、國家總力戰を中心とする政治教育を一般軍人にも或る範圍に於て課することが望ましい。國情は異なるが獨、伊並びにソ聯に於て軍の内部に於ける廣い意味に於ての政治教育、即ち國家精神的政治教育が行はれてゐるのは、單に軍人と國民、軍隊と國民の政治的統一の必要にのみ基くものではない。

#### 第四節 機構的條件

政治と統帥の調和統一を保持するが爲に、特に重要な意義を有する問題は、言ふまでもなく機構の問題である。この問題の解決は我國のやうに兵政分離主義、或は兵權獨立主義の法制が行はれてゐる國に於ては、特に困難ならざるを得ない問題であるが、今現行の

基本的機構を前提とし、その範圍内に於て言へば、問題は第一に新政治體制の中樞組織と統帥府との關係の問題と、第二には直接に統帥府と政府との關係の二の問題に區別して考へられる。

第一の點に就ては運動の中樞組織と軍部との間に、何等かの連絡機構を設置することが望ましい。世間では問題の中樞機構が從來のいはゆる政黨でないことを理由として、現役軍人の参加を差支へないものとするやうな見解も行はれてゐる様だが、問題の運動が政治運動であることは極めて明瞭であつて、從來の法制解釋を前提とする限りに於ては、現役軍人の参加が許されるかは極めて疑はしいと言はざるを得ない。

新體制がその健全な機能を發揮するに至つた暁に於ては兎も角も、其の部分性を脱却し得ない初期の階段に於ては、統帥の純正を保持すべき建前から言つて、斯くの如き直接の連絡は避けられなければならないのであつて、ソ聯は別とし、獨逸に於てはこの故に現役軍人の運動機構参加は禁止されてゐる。いはんや我國の様に兵政の分離が憲法上確立されてゐる國に於てをやである。

されば中樞機構との連絡は總理大臣亦はその他の大臣と軍部大臣との交渉によつて保持せらるゝ事を適當としよう。なほ外國では獨伊ソなど、その何れの國に於ても國民運動の前衛隊とし、又國民の國防教育機關として、黨の指導の下に青年及び在郷軍人を構成員とする尠大な軍事的團體が置かれ、獨逸などでは突撃隊を通じて軍との連絡がとられてゐる。だが、かうした組織は徒らに事態を複雑ならしむるにすぎないのであつて、教練その他の方法によつて軍事教育が直接軍によつて行はれてゐる我國に於ては、かうした組織は敢て必要としない。イタリーなどに於ては、軍事教育の二元的傾向は、黨と軍との間に一時困難なる問題を發生せしめた例もある。

さらに運動との關係を離れ、直接に國家機關相互の關係に就いて言へば、第一には省と部、内閣特に國防上直接の關係を有する總理をはじめ、その他の少數閣僚との連絡機構が考へられる。現在は兎も角も、將來に於ては連絡を強化するがためには連絡機關は戰時に於てはもちろんであるが、平時に於ても等しく置かるゝ事が望ましい。その人的構成に就ては省略するが、特に重要なことは、連絡事項を協議の上一定し、勅裁を経て恒久的ならしむることである。

理想としては、將來國防國家體制の樹立された場合には、少くとも總理大臣には特旨によつて大本營會議に列席を許されることが、政治と統帥の調整を保持するために適當であらう。これも理想であるが、軍と協力して國防の完璧を期すべき重責を有する總理大臣は軍事に對して充分な理解と才能あることを要し、軍規に服し、國防上政治と統帥の調整を保持するがためには、或る程度まで軍機をも關知することが許さるべき時代の來らんことを望むものである。

斯くしてこそ傳統的な二元主義的な國防觀念が廢棄せられ、眞の強力な國防國家的體制が樹立されることが出来る。いづれにしても政治と統帥の國防國家的體系化を確立するがためには、天皇の下に於ける政治と統帥輔翼の調和統一を必要とし、之がためには少くとも戰時に於ては、統帥と政治の人的結合が必要とせられるであらう。ルーデンドルフが總力戰下の體制として軍總司令官による政治と統帥の一元化を説いてゐるのは注目し値すべく、彼は政治と統帥の國防國家的統一を確保する方法としては、第一には國家元首

自らが軍の統帥に當るか、又は、第二には軍司令官が平時に於ては内外政策の方向を指示し、戦時に於ては自ら同時に宰相として政治と統帥を併せ統轄すべき事を説いてゐる。

### 第五節 輔佐機關の責任

兵權獨立主義の我國に於ては、天皇が統帥及び政治を各輔翼機關の輔佐のもとに統轄したまふことになつてゐるが、それにも拘らず統帥と政治の調整について從來種々なる問題があつたのは何に由來するか。天皇の親政を確保し、國防國家體制の機能を發揚せんとするに當つては、政府も軍部も反省とその職務に對する一層の努力を必要とすべく、わが國情に基く國家革新に對する兩者の責任は極めて大なるものあることが自覺されなければならぬ。

## 第九章 立法翼賛體制の育成

### 第一節 立法翼賛體制

議會制度は言ふまでもなく、近代國家に於ける最も重要な組織の一つである。嘗ては議會制度は權力分立主義の下に、之と並行して不可分の關係をもち、いはゆる代議院制度は、神が人類の進歩にたいして課した諸條件の最も大なる發明であると言はれた位、人類の社會に非常な幸福を齎すものと考へられた時代もあつた。しかしながら、過去一世紀に互る議會制度の歴史を見ると、議會主義の祖國である歐米の國々においても、初め期待されたやうな機能は果してゐないのである。多くの國々において期待は裏切られ、殊に廣く知られてゐるやうに、世界大戰後の自由民主的な反動の後を承けて、ヨーロッパの



國々では、一步一步この近代的議會主義は、他の組織にその地歩を譲らざるを得ない状態に追ひ込まれたのである。

然らば何故に近代國家の一大發明である議會制度は、多くの國々において斯くの如くに變質するに至り、没落の餘儀なきに至つてゐるか？ 勿論之を廣く言へば、歴史的變化に基くものである。併し、殊に此議會主義の没落に關聯して、われわれが日本などにおいて注意しなければならぬ點の一つは、議會主義そのものの前提となつてゐるところの、いはゆるヨーロッパ的な自由民主的法治主義の思想である。いはゆる權力分立主義、すなはち形式的には機械的な近世の世界觀を前提としてゐるが、實は法律主義であつて、議會すなはち國民を代表するものと考へられたところの議會の制定するところの法律をもつて國家の最高意思とする法律主義を重心として組立てられたところの權力分立主義である。一方において議會、他の一方においては、いはゆる大臣責任の原則に關する制度、此近代的自由主義的機構に基く不合理な權力現象を、全き法秩序の支配下に置き、これによつて、個人の自由平等を擁護し得べきものである——と、かういふ風に信ずる思想であ

る。しかしながら、この國民代表の議會制度によつて、國家權力を社會に解放する結果はどうか？ それは無力な個人を保護する結果とはならず、逆に個人保護の名において個人の自由平等を奪ひ、法治主義の名において貪慾な集團的勢力の下に個人をして犠牲たらしむるに過ぎないのである。個人それ自身は孤立しては甚だ無力である。決して現實においては、平等でもなければ、また自由でもなく、それなるが故にこそ、個人は正しく而して強力なる國權の保護を必要とする所以である。然るにいはゆる法治主義は、その自由主義イデオロギーの結果として、國家の權力を社會に解放せんとするものである。國民代表のイデオロギーの手段によつて、國家の權力を社會に解放し、社會的多邊的勢力の下に、此國家的權力を私せんとする結果を齎すにすぎないのである。斯るが故に、結局、彼の公開の席上における甲乙討論の辨證法的手段によつて、政治的な眞理を發見しようとする、それ自身極めて合理的な議會制度が、近代國家において、單なるカラクリとなり、政黨及びその背後に存する種々なる集團的諸勢力によつて、合理的な議會機構が、或は無機能に陥り、空廻りする結果に陥らざるを得なくなつたのは極めて自然と言はなければなら

ない。故に、近代的な自由民主主義のイデオロギーは國家の分裂を結果したわけである。個人を擁護するのではなくして、弱い個人を残忍な貪慾の集團的勢力の犠牲たらしめ、而して遂に國家そのものを犠牲たらしむる結果を導いた。これはそれを基礎とし前提とする自由主義がもつ犠牲的な個人觀念の然らしむるところである。

自由平等の個人觀念は、敢て社會主義的な文献の批判を俟つまでもなく、われわれの單純な經驗によつて、それは決して實在ではないのである。それは一箇の空想であり、正しく強力な社會的力の存在によつて、將來幾千年後に期待し得べき理想に過ぎない。故に、かうした空想の個人觀念を前提とし、一層強力ならしめ、正しからしめるところの國家權力を、無力ならしむるところの此近代的自由主義的機構が、歴史の示すやうな悲惨な結果を導くといふことは當然であり、敢て怪しむに足りないと言へるわけである。

勿論日本において、外形的には、わが憲法は、この歐米的近代的組織の影響を受けてゐる。廣く知られてゐるやうに、日本の憲法法典には、歐米の憲法法典において見出すやうに、一方においては、いはゆる統治の骨組を規定し、他方において、すなはち憲法第二章

においては歐米の憲法法典における、いはゆる權利章典に該當する部分を規定してゐるのである。しかしながら、此外形的影響、編纂技術とでも言ひ得べき影響を基礎として、直ちに歐米的な國家思想が、日本の憲法に内在するものとして、斯かる自由主義的見地から憲法を解釋し、憲法における政治的實踐を指導せんとすることは、それは憲法を誤るものであると言はなければならない。

しかしながら、不幸にして日本においても、彼の政黨主義の發達は、日本の國家政治および國家生活を歪曲するやうな結果を齎した點が尠くないのである。その結果、今までの議會における政黨の活動を見ても、政黨主義が齎した議會の内部的な機構を見ても、又選舉法などについて見ても、今日いろいろの點に於いて一掃し若しくは修正を要するものが決して尠しとしない。いはゆる非常時議會以來、日本においても議會の振肅なるものが叫ばれ、議會の自主的自發的な決議によつて肅正に努力して來つた次第である。しかし、今日においては、さうした消極的な改革では満足ができないのであつて、更に一步積極的な方面に向けて、相當な改革を必要とする時期に到達するに至つてゐる。既存の政黨が尠く

とも形式的には既に解消されてゐる。今度の議會は、いはゆる新體制下における最初の議會である。それだけに、新たな精神と新たなその精神を具現するに足るべき妥當なる組織を必要とするわけである。

精神の點は姑く別として、未だ此新體制下に妥當適應するやうな改革の具體案は、或は部分的には考へられてゐるかも知れないが、一般には傳つてゐないやうである。恐らく事實そこまでまだ進んでゐないのではないかと思ふ。目下稍々具體化してゐるものは、専ら議員に關係し、直接に其利害に影響を及ぼすところの選挙法のみの問題である。一歩進めて議院法であるとか、或は、議會内部の議事規定議事規則といふやうな問題に就いては、何等改革の審議が具體化されてゐるといふことを、われわれは不幸にして聞かないのである。新體制下の議會として、どういふ風にいつたい議會自身は今後の活動を自ら導いてゆくか、その議會の謂はゞ新しい覺悟をわれわれは聽かんと欲するわけである。議院法の領域において、或は議事規則その他の憲法附屬の法令において、貴衆兩院共に、斯くの如き見地からして改革を要するものは決して尠くないのである。特に差當り消極的な側面にお

いて一掃を要するものは多々ある。殊に衆議院において政黨主義の露骨な弊害の表現とも見らるべき跡を示してゐるものは、一、二に止まらぬのである。能くこれは議員達には知られてゐることであるけれども、餘り世間に知られてゐない事實であるが、彼の委員會に於ける實際を見ても、或は又、議員の待遇などに關する實際を見ても、或は議事規則の運用などについて見ても、専ら政黨の見地に基くものと考へられるものが尠くない。

今日さうしたものを残すといふことは、寧ろ新體制下の議會の恥辱と謂はるべきものである。敢てこれは議會を批難し、議員を批難するわけでは決してないが、可成り極端な例であるけれども、國民の模範となり、國民の意思および感情を代表すべき議員において、旅費の支給などに關して甚だ好ましくない事實が存在してゐる。議員は歳費の外に鐵道の無賃乗車券を支給されてゐる。故に斯かる點から云へば、別段に旅費を必要としないわけである。假りに支給されるとしても、それは勿論實費を基礎とすべきものである。然るに實際旅行しないにも拘らず、旅費を支給され、或は要求することは不合理な次第である。しかしながら過去においては、往々にして東京に居つても、猶その住所が遠い處に在ると

いふ理由で、その間の経費の支給を受けるといふやうな例があることを聞いてゐる。それは甚だ極端な例で、決して凡ての議員がやつてゐるわけでは勿論ない。稀であらうとさう信ずるのである。しかしながら、斯くの如き現象は、決して之のみに止まらぬ。多くは個人の宣傳であるとか、政黨の利益を保護する見地から、議會の議事が運用され、そのためにのみ特に制定された規定が決して今日無いわけではない。委員會の規模の如きも、やはり政黨的理由からして、無暗にこれが大きくなり、正當な翼賛の仕事をするべきであるのが、議員個人の宣傳のために、同じ期間に何遍も委員を代へて、同じことの質問を繰返す無駄な時間を、客觀的に見ると費して、平然たるやうな時代も過去において尠くなかつたのである。かういふやうな消極的な側面から見て、今日肅正を斷行すべきものが相當にある。積極的に言へば、勿論立法翼賛の精神を大いに發揮しなければならぬことは言ふまでもない。

少くとも新體制下の議會は、既に政黨を解消した建前から見ても、かうした過去の不愉快な悪夢の殘影を、此際須らく一掃すべきものである。而して國民の意思、國民の正義觀

を具體的に表現することが甚だ望ましい。ひとり衆議院に於いてのみならず、貴族院に於いては、特にかうした要求をわれわれは多くもつてゐる。貴族院令の規定に於いても、或は消極的な、或は積極的な見地から論ぜらるべき問題が非常に多いのであるが、それ等はこゝに論ずる餘裕をもたないのを遺憾とする。

しかしながら、われわれが新體制下の議會に關して注意を要する點は、いはゆる新體制の出現の結果として、一部の間に、革新的な極端の議論が、尠くともさういふ考が行はれてゐるやうに見受けられる。いはゆる全體主義といふやうな、このヨーロッパのある國家組織などを聯想して、日本の新體制下に於いても、ドイツとか、或はイタリー邊りですつてゐるやうな議會制度を直ぐに採用すべきであるかの如くに考へる向きも決してないのでない。しかしながら、それは勿論日本に於ても實現し得べきものでなく、又實現されることが望ましいものでもない。ドイツの議會の如きは、今日議會は在れども殆んど議會の機能はもつてゐないのである。單にナチス黨の、謂はゞ示威の機關に過ぎないものであつて、立法權において、政府監督權において、議會のもつ重大な權能といふものは、授權法

の結果として、ヒットラー一人に與へられてゐる。單に議會は、謂はゞ、政府を激勵する一個の機關にすぎない。かういふやうな組織は、もちろん日本憲法上實現ができない。又實現が望ましいことでもない。またイタリアの一九三八年の改革以後に於ける組織を日本に許すことも、まだ日本の國民組織が出来上つてゐないのであるから、それも目下の處實現はできないわけである。

積極的にどう改革すべきかといふことは、新體制の發達と密接な關聯を有する問題であつて、今その發達の過程にある今日に於いては、選舉法などに於いて、尠くとも、從來出てをつたやうな一部の望ましくないやうな議員を差當り再選せしめないといふ程度に止めるのが、恐らく選舉法改正の重點ではないかと思はれる。新體制の運動が、その政治性をもつと明確になり、強力になれば、何もさういふ選舉法に、大きな改革を加へる必要がない。改正を加へるまでもなく、實踐の運動によつて、期待し得るやうな議員も相當議會に送ることが出来るわけである。今日選舉法に重きを置くことは決して悪くはないが、餘り選舉法の改革に重きを置き過ぎる傾向があるのは、それ自身一つの形式主義の弊害であり

法律萬能主義の誤りに基くのである。それよりも現實の實踐運動を盛んに展開することが必要なわけである。

## 第二節 翼賛議會體制の指標

いはゆる全體主義の政治は、その本質において反議會主義的であるが、又必ずしも反議會的ではない。蓋し全體の利益を無視する黨利本位の政黨政治である在來の議會政治に反對して、全體主義はこれを全面から否定する態度を採るものであるが、一國の政治に議會制度を通じて衆議討論の要素を採り入れることについては、敢て反對するものではなく、否な一定の制限下に議會をして國民代表の、たとひ從來のやうに唯一の機關とは見做さぬまでも、少くともこれを一種の代表機關として國政に參與協力せしめることは、政治の本質上積極的に必要だと認めるものであるからだ。

これドイツ主義やイタリア主義の共同體觀念に基く現代全體主義政治が、歴史的な専制

主義や單なる武斷主義とその本質において異なる所以の一つである。

故に今日獨伊の全體主義國家において、議會制度が維持されてゐるのはナチスやファツシヨ黨の創造的能力の貧困を意味するものでもなく、また國家の歴史的繼續や黨支配の合法的な外觀を保全し、以てその支配を容易ならしめようとする技術的必要によるものでもない。この點は國民全體の生活から遊離獨立した中間の力である「政黨」の一掃によつて獨伊の議會がその中身を一變したばかりでなく、その權能や審議の方法においても新たな制限と目標と形式が與へられ、強力な統一指導の下に、その面目と内容を一新してゐる事實に徴して明かである。

以前の議會は、階級的な唯物勢力や自由民主主義的政權あさりの狐狼の惡質取引や、その咬み合ひと咆哮を傳へる國家的には無意味な擴聲器に過ぎない感があつたが、今では睿智、勇氣、榮養の有機的一や政治的理想と國民的規律並びに文化と經濟の綜合的代表的機關として政府に協力する役割を有し、全體の精神と潑刺たる國民生命の躍動を傳へる機關であつて、もはや昔日の無意味な騒音發生器ではないのだ。

我國に於ける立法翼賛體制の確立は、執行翼賛體制並びにその下に於いては國民組織確立の問題と相俟つて、大政翼賛の有機的國防體制に缺くことの出来ない條件である。この問題について、政府及び大政翼賛會當局が如何なる計畫や案をもつてゐるかは知らないが、新體制の樹立には二つの制限があることを忘れてはならない。

その一は獨伊その他の歐洲式全體主義の體制を他山の石とすることはよいが、各國の特殊事情や個性を基礎とする自然的禁輸品模倣の愚を避けることである。勿論採らうとしても重要な點において、わが憲法の明文が許さぬものがあるが、たとひ憲法の範圍内で採り入れるにしても、鴉が鵝の眞似をする自主性のない態度は新體制の運動からは一掃されなければならぬ。

その二は新體制運動の生命である皇道翼賛精神を立法院に躍動せしめることであり、これがためには從來の消極的な議會制度振肅の範圍から數歩を越え、從來立憲主義や法治主義の名に於いて往々行はれて來た近代的幕府政治の謬想から目醒め、臣道實踐の批判的見地から、議會並びに政府制度を再検討し、立法協力體制を確立することである。官といは

す民といはず、皇民的な批判的意識と性格を具備しない限り、如何なる制度改革も單なる彌縫の範圍を出ないことを知らなければならぬ。

### 第三節 翼賛議會の責務

憲法實施以來既に半世紀、この間我國の政治は權力分立的な初期の自由主義から多黨的議會に推移し、更に轉じて今日に於いては大政の翼賛を目的とし、全國民の臣道實踐を目的とする運動となつてゐる。

今日に於いては政黨は既に解消せられ、政治の目的は自由にあるのではなく、自由のための政權の爭奪にあるのではなく、専ら國防國家の建設をその具體的目標とする大政翼賛の全國的な運動におかれ、政治の原理は過去に於けるやうに、現體の維持や環境への適應にあるのではなく、専ら我國民に課せられた世界史的使命達成のための創造にある。この故に獨り議會とのみ言はないが、特に議會は國民代表の憲法上の機關であり、而して今度の議會

は政黨解消後の新體制下に於ける最初の議會であつて、その公の機關としての使命は極めて重大であり、今年の議會は新時代の試煉の議會であつて、議會がその使命を達成するためには消極的にも積極的にも色々な條件を具備履行することを必要とする。

先づ第一に、消極的には新議會は部分的利益的な政黨の習性から脱却し、政權爭奪の政黨的衝動を克服しなければならない。我國の政黨は同じ部分的であると言つても、國情の相違の然らしむるところ歐洲諸國に於けるそれとは異なり、それ程極端なものではないにしても、なほ多年に亘る政黨政治の實際は、單に議會の内部に於いても或は議會の態度に於いて、或は議會内部における諸種の制定規定に於いて、立法翼賛の本旨に矛盾する多くのものを残してゐる。新議會は過去の悪夢に目醒め、立法翼賛の道德的勇氣に基いて、政黨主義の殘滓を一掃すべきである。これ新體制下の議會にとつて當然な事柄であるが、多分に便乘的分子の多い現在の議員にとつては、かうした當然の條件履行も可成りの難事であらうと思ふ。

私は舊政黨員が大政翼賛會の弱腰に乗じて、議會新黨の復活を策し、議會制度の決定的

破壊を齎らす如き暴舉を取てせざらんことを望まざるを得ない。第二に、積極的には新體制の議會は立法翼賛の趣旨を體し、國民代表機關として國民の政治的理想を表現し、國內的には國民の臣道實踐を指導し、あらゆる困難を忍んで國防國家の建設のため政府は協力すべきであると共に、國際對外的には東亞新秩序建設にむかつて政府を鞭撻し、あくまでも國家の大局的見地に立脚し、下情を上達し代表して政府と共に世紀の轉換が齎らした歴史的怒濤の突破を敢行する心構へが必要である。

## 第十章 翼賛運動とその機能強化

### 第一節 翼賛體制と指導者の責任

新政治體制設立準備委員會の構成も既に成り、待望の舉國體制が樹立される日も愈々間近になつた事は、國家の爲喜ばしい事と言はなければならぬが、新體制がその機能を發揮する爲には前途多くの困難を克服突破するを要す可き事は言ふ迄もなく、茲に特に重要な一二の點を擧げて指導者の注意を喚起して置くことは、敢て無用であるまい。

新體制が第一に當面する、最も困難であり、又或る意味に於て皮肉な問題は指導者の問題である。新體制の技術的問題や事業に關して、その人を求むることは別に困難は存しないであらうが、新體制の生命である基本的な政治指導に關して、近衛公の帷幕に參畫し公



を輔佐するに足るべき所要の精神的資格を備へた權威ある人物を得ることは、差當り極めて困難であると言はざるを得ない。舉國體制の基本的目的は己を空しくして國に報ずる皇道翼賛の國民的性格を鍊成強化することにある。此故に、斯くの如き大事業達成の任務を擔當すべき新體制の指導者は、自ら最も模範的な皇民性格者たることを要し、至誠奉公、生命を賭して皇道に奉ずるの絶大なる道德的勇氣と、犠牲心を備ふる者でなければならぬ。國情は異なるが、世界觀のため一身をさぐる道德的戰士は、歐洲の全體主義諸國に於ては黨の多年にわたる惡戰苦闘のうちに自然に數多く養成されて居り、随つて舉國體制の確立に際しては別段指導者の不足を感じない。我國に於ては之と異り、舉國體制の指導中樞は近衛公を中心として國民各層の未だ新しき指導者としてその能力の實證されて居ない多種多様な分子から構成さるべき情勢にある。此點に於いて新政治體制は今後姑くの間は指導者無き指導體制たるの感無きを得ないのであつて、新體制をしてその正しき指導機能を發揮せしむるがためには、大なる困難を伴ふべく、私は新體制をして形を變へた政黨主義たらしむることなく、悪い意味に於ける獨裁政治體制に墮せしむることなきやう切に新

體制中樞部の人々にその道德的奮起を望まざるを得ないと共に、近衛公に對しては部下に對する高度の統制と新體制の内部に於ける峻嚴なる規律の設定を望まざるを得ない。

第二に、新體制は飽くまでも實際的であり實行を本位とすべく、従つて組織は實行力に應じて之を設け、當初から尠大なる組織を作つて實行之に伴はず經費と勢力の徒費に陥るが如き官廳的形式主義や、日本にありがちな組織病の弊に陥らぬやうに注意されなければならぬ。新體制が如何なる組織をもつて理るゝかは、準備會の決定に俟たざるを得ないが、外國の例に依つて見ても、明らかであるやうに尠大な組織となる可能性がある。統制と指導力が伴はない場合に於いては國家内に國家を作り、從來國家機關相互間に於いて行はれたやうな相剋と摩擦を一層深刻な形式に於いて、一方に於いては國家機構と他の一方に於いては新體制との間に反覆する結果となり、従つて新體制は皇道翼賛の國家と、國民の有機的體系の實現を目的とするところか、反對に國家のため有害無益な機構となることなきを保し難い。この點亦指導者の最も注意を要する點である。

最後に、而してあらゆる點にもまして重要な事柄は新體制は 天皇の親政を翼賛する體

系でなければならぬ事である。此點に就いては近衛公は 天皇の輔弼に就て從來の形式的責任の弊を一掃するに慎重な考慮と努力を拂はれるであらうことを私は期待する者である。

140

## 第二節 翼賛體制と日大的性格

鐵血宰相といはれたビスマルク公は、政治を定義して「可能の技術」であると言つたがこれに反して第三獨逸帝國の總統および宰相アドルフ・ヒットラーは、政治を以て「一見しての不可能事を可能ならしむる技術」だと言つてゐる。之等二つの政治觀は互に相反し矛盾するが如くに見受けられるが、その實體に於いては毫も矛盾するものではない。

何となれば、ビスマルクの政治觀は十九世紀的國家世界に、政治を對象とし十九世紀政治觀たるに反し、ヒットラーのそれは、二十世紀現代の全體主義的國家の政治觀であり、全體主義的國家世界の典型的政治觀に外ならないからである。

蓋し實際政治の内容は實在の情況に依つて變化するを免れず、古代都市國家の政治と近代警察國家の政治、または立憲國家の政治とは、各々その意味を異にし、重點を異にすることは廣く知られてゐる如くだが、之を十九世紀的國家世界に就いて觀るならば、この世界に於いての政治は政府對議會、又は政黨相互間の闘争や妥協を重心とする内政本位の活動であり、此點において「可能の技術」に外ならないが、これに反して二十世紀的國家の政治は、中核を國民に置く外交および國防重點主義の綜合國力國家の政治であり、傳統的政治觀を以てしては、不可能なる現象だからである。

詳言すれば、十九世紀の歴史的發達の結果として、現代に於いては政治はもはや全體としての國民から游離、又は離反した政府(官僚軍人)對議會(政黨)又は多黨相互間の妥協の技術、ビスマルクのいはゆる「可能の技術」ではなく、公敵を外に有することによつて「一見しての不可能事」——例へば反自由民主的全體主義の舉國的強力政治や、國際秩序——を可能ならしむる技術(ヒットラー)であり、政治關聯を統一的全部としての國民に置く、國防國家的國民指導に外ならないからである。

141

此故に我國に於いても政治基調の變換が特に滿洲事變以來の外交、及び國防上の必要に依つて決定され、促進さるゝに至つたことは自然であつて、この數年來の國內の非常時現象であつて、直接間接この外交及び國防狀勢の變化に、その原因を有しないものはないといつても敢て過言ではなからう。

されば、いはゆる非常時に入つて以來、歴代の内閣は此點に於いて略々その型を同じくするものであり、多少の程度において國防國家的意圖を持たないものなく、特に支那事變以來、内閣は、何れも戰時體制確立の形式において同じ使命を有する。此點に於いては近衛内閣も亦同様であるが、たゞ現内閣が従前の歴代内閣と異なるところは、從來の内閣は何れもその基本的性質に於いて、吏僚的内閣の型を脱せず、弱體内閣であつて、國防國家體制の建設に缺くべからざる國民指導の政治體制を有せざるに反し、現内閣は反政黨的な新指導體制の結成に依り、國民的基礎の上にその強力政治を可能ならしめんとする點に於いて特色を有する。此點に於いて現内閣は革新内閣であり、その意圖を實現するに足る準備と力を有する強力内閣たるの可能性を持つものと言ひ得る。

世人が近衛内閣に特に期待する所以もまたこゝにある。その性格並びに力量に於いて我過去半世紀の憲政史上、全く前例を見ない革新的内閣であり、今後百年または尠くとも五十年の間、わが國家生活の基礎たるべき體制を建設しようとする意圖を有するものであるだけに、近衛内閣に對して希望さるべき事項の極めて多いことは自然である。

先づ之を世界政策の見地から言へば、近衛内閣の使命は事變の速かなる完遂と、東亞大生活圈主義、東亞一家族主義を實體とする新秩序の建設を確保し、以て今次歐洲の大戦を序幕として、第二第三の世界的變革を經、今後五十年または遅くも百年の内にやがて來ることあるべき決定的世界的變革に對し、東亞新秩序を中核とするわが八紘一字の世界政策に不動不可侵の地歩を得せしむることにあらねばならない。

新たなる國內體制、國防國家體制の建設は、すなはち此目的に出づるものであつて、この點に於いて新體制の樹立は、國家百年の大計を確保する所以に外ならない。だが、斯くの如き未曾有の革新を可能ならしむるがためには、種々なる精神的、人的並びに機構的條件を必要とするが、なかんづく、こゝに特に指摘しておきたい點は、その世界觀的條件で

ある。

改革を可能ならしむるがためには、われわれは過去の歴史が齎らした一切の不純な技巧的要素を一掃し、不純なイデオロギーや現状維持を固執せんとする一切の利害から脱却超越しなければならぬ。われわれは、たゞ生一本の日本人となり、一君萬民の皇民としての自覺に立ち返り、こゝに出發することによつてのみあらゆる障害を突破し、偉大なる國家的歴史的創造を確保することが出来る。言ひ換へれば、日本人に歸れといふことは、建設のモットーでなければならぬ。蓋し今日の日本人には虚が多過ぎ、技巧や僞善が多過ぎるからであつて、新體制の根本的原動力は、この故に日本民族の倫理と本能に基礎を置く明確な世界觀であることを必要とし、日本の國家をして皇道主義の倫理的國家たらしむることによつてのみ今後の歴史的創造が可能である。

近衛内閣に對して、施政の根本條件として要望せらるべきものは、斯くの如き日本の世界觀に基づく國民指導の明確なる原理であり、大衆に訴へ得べき熱情のモットーである。斯くの如き、正しく且つ有效なスローガンなく、國民の正しく強き熱情を誘導する能力なき

くしては、國民を基礎とする強力政治は不可能である。國民の鐵壁の結合は空想に過ぎないであらう。

### 第三節 大政翼賛會の結成と議會

近衛首相は京都都ホテルに於ける時局談に於いて、新體制運動を思想運動だと言つてゐたが、もとより單なる思想運動ではなく、國家的な存在鬭争であり、公民としての日本全國民の本質を擁護し、日本民族の世界史的使命の達成を確保するがための決死の全面的鬭争でなければならぬ。その目的とするところは、官といはず民といはず、多年わが國民の思想及び生活内容に喰ひ入り、わが國民の本質的個性を失はしめ、日本民族をして國家的廢人たらしめ、總力戰の無資格者たらしめんとする思想や、行動の敵性を自覺し、その支配的勢力からわが民族の個性と獨立を奪還し、これを確保せんとするにある。わが國民精神に内在する皇道主義的超人格主義の世界觀と、國家觀とに基づき、我國家及び國民生

活を再編成し、國民の倫理と本能とに基づく指導者の運動と合理的な機構とによつて、眞の皇民的國民性格を鍊成強化し、以て最高最強自守獨立の鐵壁の如き國家及び國民體系を恒久的に確立せんとするにある。

その精神並びに方法に於いては、あくまでも憲法の内容並びに規定に準據し、苟もこれを逸脱する如きことなからしめんとするものであるが、新體制の影響するところは極めて深刻且つ廣汎であつて、從來の實情に鑑み、まさに一大變革的意義を有するものであることは何人もこれを否定し得ないところである。

されば、在野の近衛公が一人として新體制運動を開始する場合は兎も角も、苟くも内閣の首班となつた公が準備會を招集し、政府の首腦者が總理大臣とし各大臣としての公の資格において新體制組織の確立に參畫し、斯くの如き未曾有の國民的變革を斷行しようとするに當つては、本來ならば事柄の重大なるに鑑みて、憲法上の公議の機關である帝國議會に諮り、政府の意圖と責任を明かにするの處置に出づることが當を得たものといはなければならぬ。たゞ準備會開催當時の事情の下に於いては、かうした處置をとることは實際

上困難だつたであらうから已むを得ないにしても、既に大政翼賛會の機構も成つた上は、なるべく早い時期において、臨時議會の召集を奏請し、新體制運動の目的性質をはじめ、これに關する政府の所信を明らかに置くことが妥當と思はれる。此點は新體制運動に對する誤解や疑惑を一掃し、新體制下の政治をして眞に權威あらしむるがためにも必要であつて、新時代の政治は傳統的政治にありがちな一切の欺瞞的手段から脱却したものでなければならぬ。

#### 第四節 理論人的性格と政治人的性格

新體制運動は傳統的な政治運動ではなく、大政翼賛會はいはゆる政黨ではないが、しかも官民協力の全國民的の最も強力な超黨派的普遍的性質を有する全體的政治運動であり、その原動體である。故に大政翼賛會の發會式ではその基本綱領をはじめ、一般綱領並びに適切なスローガンについても近衛公から發表があるものと一般に期待されてゐた。此點は

運動そのもの、實踐的な内在的必要からいつても、また新體制運動が國家及び國民生活に齎らす重大な變革に鑑み、國民がその性質や運動内容に關して、最も深い關心を有する事實からみても當然であらう。

だが、豫期に反し近衛公はその發會式に於ける聲明に於いて、新體制運動の本質に關聯してこの運動には別段に綱領として發表すべきものなく、強ひて言へばその綱領は大政翼賛の臣道實踐において盡き、他に發表すべき宣言綱領は無しと言つてゐる。

いはゆる衆議統裁による型を破つた聲明であり、運動の本質に關する近衛公の慎重熟慮の結果に基くものであつて、その趣旨とするところは之によつて此運動が一君萬民のわが國體の本義に内在する當然自明の運動であり、日本臣民としての本分に基く皇道翼賛の普遍的唯一絶對的な運動であることを明確ならしめ、何等特別の綱領を必要としないこの運動が、その本質に於いて、部分的でありまたは利害の結社である傳統的な政黨や、その運動と如何に異つたものであるかを一般國民に理解せしめ、以て新體制の本質に關する誤解や疑惑をして、その存在餘地なからしめようとするにある。

著者は、この裁斷に示された近衛公の慎重な態度に對しては深く敬意を表するものであるとともに、また責任者としての公の苦衷は察するに餘りあるものがあるといはなければならぬ。だが一面からいへば、この點に關する近衛公の裁斷は理論的にもまた實踐的にも必ずしも當を得たものとはいひがたい。

即ち、理論的には公の見解は傳統的な政黨の狭い綱領觀に墮し、綱領そのものと政黨の綱領とを同一視し、一部の世評を氣にし、誤つた形式の美に囚はれ、新體制運動の非政黨的運動性を強調するがために綱領の無用を説くの誤りに陥り、この結果として、更に第二には、綱領の新體制運動にも重要な意義を有する實踐的宣傳的機能を見過するの誤りをも敢てするに至り、一般國民をして新體制運動の實踐的能力や指導者の運動に對する自信の缺乏を疑はしむる如き結果に導いた嫌ひなしとしない。

斯うした誤りは指導者としての弱體性でもある公の性格の理論的、默想的側面の然らしむるところであつて、此點に於いて公自らが斯くの如き性格的側面を克服し、あくまでも強き行動人として指導に當るべきことは、新體制の實踐的能力の確保に重要な意義をもつ

ものといはざるを得ない。敢て苦言を呈し、國家のため公の自重を希つてやまぬ次第である。

### 第五節 臣道實踐と國防の倫理

新體制運動は皇道翼賛體制の確立運動であり、また皇道翼賛の不斷の實踐運動である。近衛公は大政翼賛會發會式の式辭に於いては、これを臣道の實踐と言つてゐる。この意味に於ける臣道の實踐は、わが國體に内在し、わが國體の精神、強ひていへば皇道主義的超人格主義とも言ひ得べきわが國家體制の本質に内在する要素であり、皇民實在の核心である。臣道の實踐はまさに日本國民の生命であり、また生命の法則でもあつて、わが國の興亡盛衰、わが國民が世界史的創造發展に寄與し得ると否とは、基本的にこの日本的な協同意識と、これに基く實踐的能力の密度と範圍に依存するといつても、過言ではなからうと思ふ。

蓋し國力の有效適切な集結と運用は、國家的存在とその歴史的創造的發展に不可缺の條件であることは言を俟たないが、しかもそれは決して單なる「知性」のなし得るところではなく、國民の最も強力な、謂はゞ殆んど宗教的ともいひ得る超個人的な結合を可能ならしめる倫理でもあり、また一面において自然でもある皇道への歸一力を外にしては不可能ならざるを得ないからだ。

されば臣道は、これを分析すれば二の基本要素に基礎を有するものといへる。その一は自然並びに心理的要素であつて、臣道はその後者の側面に於いては日本臣民の 聖上に對し奉る最も普遍的であり、且つ強力な尊崇の感情として現はれ、國體の神聖は意志を超越する皇民感情の必然である。だが臣道の自然基礎は決して單なる感情にのみ止まるものではなく、臣道は同時にまた歴史上の實在が證明する國民生命の法則であり、日本民族の消長を左右する實在の必然法則であることに注目されなければならぬ。臣道はかく必然的な基礎を有するが、もとより單なる必然の法則ではなく、同時にまた日本臣民の最高の倫理でもあり規範でもある。

臣道が自然の基礎を有し、必然の法則でもあることに於いて、その倫理性は自然から遊離した抽象的形式的な法則性ではなく、生命に即し國民の生活に結び付いたわが國體の倫理的軌範である。故に臣道の實踐は生命の法則に基くわが國民生活の必然現象であるとともに、またその倫理の當爲でもあつて、この點に於いて臣道並びにその前提とする皇道はその本質において生力的なものと倫理的なもの、必然と當爲、内在と超越の根源的調和統一の構造であり、われわれはわが國體の本質である皇道において、同時に國防の倫理的基礎構造を發見することが出来る。近衛公が、臣道の實踐をもつて、國防國家體制の確立を目的とする新體制運動の性格に基く當然自明の綱領だといつたのは偶然ではなく、國防國家體制は、わが皇道國家の最も自然な發展形態であり、眞の國防國家は我國においてのみ可能であるといふべきであらう。

## 第六節 惟神道の世界觀

緑濃き宮城外苑に於て皇紀二千六百年記念式典の舉行さるゝに當つて、畏くも 天皇、皇后兩陛下親しく式場に臨御したまひ、民草の奉祝を嘉みしたまふと共に、時艱克服の大道を重ねて宣諭したまひ、惟神大道を中外に顯揚すべしと勅したまへることは、國民の恐懼措く能はざるところといはなければならぬ。官民は聖旨を奉戴し粉骨碎身、時艱を克服し、宸襟を安じ奉らなければならぬ。

惟神の道は皇道であり、皇室を宗家とする日本民族の最高精神である。この道がいかに宏遠崇高なる精神を示すものであるかは、それが創造的進化の完結の世界觀を基礎とする精神であることに於いて是を知ることが出来る。蓋し皇道は神勅の奉承祖述による不斷の創造發展であつて、この點において保存や現状維持を以て、その根本態度とする形而上學や歴史の領域に於ける保守主義を克服するものであると共に、また他の一面に於いては飽くまでも實踐的であることにおいて、自由主義や唯物主義の世界觀的前提をも克服するものであるからだ。のみならず、皇道の世界觀は、合理主義と非合理主義の對立をも克服する。蓋し皇道はわが國家生活を可能ならしむる理念であることにおいて、絶對の性質を



有すると共に、一方においては皇道は單なる形式ではなく、最高の規範であり、また生命たることにおいて内容と實體を有するからである。

更に皇道主義はまた彼岸と此岸との形式的對立を克服する。蓋し皇道は惟神の奉承實踐であつて、國家の創造を内容とすることにおいて、現世的であり歴史的實在に對して肯定的樂觀的であり、以て悲觀的な遁世や天道などの超越主義を克服すると共に、一方では國土と文化の創造育成は至上の「神の命」にその絶對的基礎を有し、その奉承實踐にほかならないことにおいて同時に超越性を有し、單なる人間主義を克服する。天皇が現神人にあらせられ、至誠至高にましますのも、また我國に於いて祭政の根本において一致する所以もまたこの皇道の全體性に基くものである。

わが國民が一方において著しく非融和的であり、性格的に閉塞的であると共に、一方ではまた包容ならびに解放的であり、保守と勤勉努力の進取適進性、固守性と適應の伸縮性をも併有し、また同時に一方では精神的であると共に著しく技術的適性を有し、利益的現世的な西洋の精神と宗教的神秘的な東洋精神の外にあつて、兩者を独自の體系において綜

合統一する能力と使命を有するものと信ぜられてをり、わが國民性が、異質的なものゝ特異な消化融合の資質を示してゐるのも、つまり、この皇道精神の全體性に基くものといへよう。

わが國體が萬邦に冠絶し國體の精神が獨り内において國家の生命であるのみならず、亦文化創造の世界的精神たる所にもまたかうした崇高な世界觀的基礎を有するによるものといへよう。

## 第十一章 政治の危機とその克服

### 第一節 政治の飢饉

ヒットラーは政治をもつて「不可能を可能ならしむる技術」だといつてゐるが、これ最もよく現代政治の責任を指示するものであると共に、又一面においては、世界各民族がその國家生活において今日直面してゐる歴史的試煉のいかに困難なものであるかを物語るものといへよう。

可能な事柄を現實ならしむるわざは平凡の技能である。それは行政であり、通常人がなし得る事務處理の機械的な役人仕事であつても、國政の指導ではなく、たとひ十九世紀的な傳統と安定の通常状態における政治であり得ても、國家と民族をして世紀の轉換がまき

おこした残忍な歴史の怒濤を突破し得べからしむるわざでは絶対にあり得ない。世紀のあらしが現代の國家にもたらした起死回生の英雄的な課題は、たゞ民族の倫理と、本能の生命の琴線にふれた良心と勇氣と、知性の眞の責任と創造力ある政治によつてのみ解き得べきであり、かゝる政治指導を有する國民のみが、假借なき歴史的鬭争の過程においてその自由と獨立を確保する榮光を有し得るのだ。

この點において、わが國政の現状は、現代政治の要求から遠ざかることなほ迫かなる状態にありといはざるを得ないのを遺憾とする。非常時以來の歴代内閣の施政が糊塗漏縫と泥繩流の出おくれ對策の範圍を出づることなく、その結果は甚だしく國威を内外に失墜し、事變と國力の消耗を慢性化し、徒らに可能を不可能ならしむるに過ぎない觀があつた。

新體制樹立の運動は、かゝるした事變政治の病根を一掃し、政治の貧困を拂拭するために行はれたものであるが、それにも拘らず運動の基本的態度と實情とは、その本來の使命に反するものあるを免れない。けだし勢力均衡主義は近衛公の基本的態度であり、その世界觀であらうと思はれるが、それは根底において自由主義の世界觀であり、順應と便乗の基

本的態度であつて、あくまでも主動的な創造の世界觀とは相容れないからである。

大政翼賛會が各種の分子の過剰な便乗によつて運動の自由がきかない状態におかれてゐるのは、それゆゑに別に怪しむに足りない。諸勢力の陳列やその相互牽制では機械的な均勢は可能であつても、國難突破の創造力は期待し難い。

今やわが國の政治は貧困を通り越し、飢饉の域を彷徨してゐるが、その原因は主としてかうした世界觀の不純な性質と、これに基く指導力の缺乏にあるものといへるだらう。新體制のパスは木炭ガスをガソリンに變へ、強力な運轉によつて不要な重荷を振り落すことが必要ではなからうか。

## 第二節 協力突破

最近の新聞記事は時代の變革と苦難を物語る典型的な事象を矢継ぎばやに傳へてゐる。僅か一週七日といふ短い期間に集約されたことは勿論偶然ではあるが、事柄が何れも時艱

の實體に觸れ、これを表現または印象せしむるものであるだけに、そのもたらす心理的な綜合的效果は著しく、この點において以下に示す注目すべき現象の集約的發生は、時の偶然が未だに醒めない我が國各界指導者に對して與へた極めて重大な警告であつたといふべきであらう。

その一は言ふ迄もなく最後の元老西園寺公の逝去であり、その二は帝國議會開設五十年記念式典の舉行である。一は悲しく一は目出度い事柄であるが、なほ兩者は反面においてわが國政における政黨政治の發生と、その劇的轉落を物語る一事において時代の變革を記録するものであり、五・一五事件を序幕として開始された歴史の假借なき淘汰が如何に多くの指導者に對し悲しむべき犠牲をもたらしたかを想起するならば、經綸もなく決死事に當る覺悟もなく徒らに國力を共喰ひするに過ぎないやうな吏僚的指導者や、政府及び大政翼賛會の弱腰に乗じて策動する惡質の現状維持的利己主義者並びに國難を喰ひ物にする各種の便乗者、または寄生的存在はこの機會を逸せず速かに反省すべきであらう。

その三及び四はわが國政の疾患と不可分の關係において發生し且つ慢性化した事變の處

理並びにその國內體制に關するもので、一は支那事變處理基本條約の締結を中心とする外交上の措置であり、他は政府と統帥府常設連絡會議の開催及び海陸兩大臣の名を以て行はれた政治強化の提議である。

いはゆる正統國民政府を助長育成し、これと事變處理の條約を結ぶに至るまでには、軍事上の努力はもちろん、政治上にも多くの勞苦が拂はれたことは察するに餘りありとはいへ、この新條約の目的とする新秩序の建設は、その世界的並びに革命的性質上これを世界新秩序との關聯において遂行するを得べからしむるわが國民自身の創造的世界觀に基く心の革命と、これによる國防國家體制の建設を前提とせねばならぬ。この點において條約の締結は目下の階段においては實際的意味における新秩序を保證するものでは決してなく、條約は單に將來日本の指導力によつて與へらるべき保證を可能とする技術的形式に過ぎないのである。

かく新條約の實效は擧げてわが國の世界政治的指導の實力に依存するものであり、従つてその基礎體制たるべき國防國家建設が前途なほ遼遠なる今日においては、この條約が多

分にプラトニックであることは避け難く、率直に言へばかうした事變處理の技術的形式はわが國政の疾患と貧困を赤裸々に表現するものといはざるを得ないのを遺憾とする。

それにつけても、過去の誤りを反覆することなからしめ、東亞新秩序をして忠靈の犠牲によつてかち得た一片の惡夢たらしめざらんがためには、國防國家建設の促進は、まさに焦眉の急といはざるを得ない。しかも不幸、今日ほどわが國政が威信を失墜し國民が前途の曙光を遮られ、國家の無力を最も赤裸々に内外に暴露してゐる時はない。

この故に遲きに失するの觀ありとはいへ、軍部の兩大臣が政治力の強化を求め、政府並びに大政翼賛會の健全なる發達を支持する強硬なる態度を表明するとともに、一方連絡會議の開催によつて統帥と國務の調和協力を確保するの積極的措施に出でたことは極めて當を得たものといふべく、失神の國政に一脈の生命を吹き込む效果あるものといへるであらう。陸海軍の鐵壁の如き一致不動の態度は、國政と治安確保の絶對條件である。爲政者は軍と協力し乾坤一擲時艱の突破を試みなければならぬ。

### 第三節 防諜と政治

わが國の眞の敵は、蔣政權といふよりは寧ろその背後にあつて重慶政權を囹に使ひ、蔣を督戰してゐる援蔣諸國であることは今更いふまでもないが、最近これら敵性諸國のために、知るや知らずや、第五列的な國內攪亂や國防國家建設妨害の役割を演ずるものが著しく増してきたことは寒心に堪へない現象であり、國民の最も警戒々心を要する所といはなければならぬ。

流言蜚語は銃後國內攪亂のありふれた手段である。國防國家の建設をめざす新體制運動が發足するまではそれ程の事もなかつたやうだが、いよいよ大政翼賛會が出来、日獨伊三國條約の締結と相俟つて、國家的進路の目標が明確化され、運命の必然がもたらす經過的な摩擦や犠牲の増加するにつれて、極めて惡質のデマが跳梁氾濫し、これがため一時は内務大臣や情報宣傳機關の存在を疑はざるを得ないやうな感を懷かしめたこともあつた。

だが、流言蜚語はゲリラ戰の一形式にすぎない。それは臆病遲鈍な政治指導の間隙に乗じて發射される錯覺彈であつて、國民の政治的常識によつて容易く見破られ得べく、また情報宣傳および警察の敏活な活動によつて直ちに拂拭撤去し得る社會心理的迷彩にすぎない。ゆゑにこの種の攪亂手段は時には奇襲電撃の效果をもたらすが、その性質上敵臭が強烈であるだけに、發見の容易な敵の補助的攪亂手段であり、必ずしも恐るゝに足りないが巧妙にして恐るべき效果を有するものは、指導者層の利己的錯覺を巧に利用する思想や制度戰であり、その内在的弱點を利用する第五列の國家總力戰妨害又は破壊の機能である。この點において私は、國防國家體制の速かなる確立を困難ならしめてゐるわが國指導者層の歴史的錯覺は、わが國政を第五列の活躍に委するに等しい状態に陥らしめてゐることを指摘し、警告せざるを得ないのを遺憾とする。

官僚の自己を除く統制と、革新の自由主義的錯覺、實業家の資本主義的錯覺、議會人および舊政黨人の自由主義的法理錯覺、大臣の輔弼責任に關する「立憲主義」的錯覺、並びにこれら諸層に依存するインテリの反射錯覺は、ことおげせぬ日本魂の發露を妨げ、 天皇

に捧げ奉る國民的政治力の集結を妨げてゐる錯覺であらう。錯覺は疑ひもなく非日本的だが、私はこれを利己的錯覺と言はずに寧ろ歴史的錯覺と言ひたい。

帝國議會開設以來五十年、歴史の深刻な教訓を後ろに、新體制下の翼賛議會は、新發足を以て集會する。私は議員諸君が危険なる錯覺から完全に解脱し、眞に國民を代表し、翼賛奉公の實を示し皇民精神を遠ざかる事の甚だしい自由主義的憲法理論の反覆によつて、國力の集結を妨げ、徒らに敵を喜ばすにすぎざるが如き愚學を敢てせざらんことを切望する。

#### 第四節 常侍輔弼責任の合理化

西園寺公も急に歿せられたが、恐らく公を以て最後とするだらうと思はれる所謂「元老」といふ現象は、廣く知られてゐる様に法律上の制度でなく、憲法法律完成又はその他何らかの法律上の形式に依つて定まつてゐる組織でなく、専ら憲法の實施に伴ふ新なる國

政運用の實際上の必要に基いて現れてゐる政治上の習慣に他ならない。従つてその起源であるとか、或はその機能等は必ずしも明確でなく、特にその機能においては時によつて色色な變化があり、その實體を正確に把握することは困難である。

元老は大體に於いて二つの要素を基礎とするものゝ如くに思はれる。一つは元勳優遇の聖旨に基くものであり、他の一つはこれに基いて生ずる元勳の側に於ける 天皇輔弼の極めて廣い意味の一般的な道徳上、政治上の義務といふべきものである。

元老の政治的機能は専らこれら二つの要素をその實體とするものであるが、以上二つの要素のうち、前提的である元勳優遇の現象はこれを歴史的にいへば既に憲法實施以前しはば見られた處であるが、所謂「元老」はかうした憲法實施前からの慣はしと歴史的關聯を持つものといへる。

その憲法制定後に於ける最初の現はれは明治二十二年黒田清隆に對する元勳優遇の勅旨に恐らくこれを求め得べきもので、黒田の後引續いて伊藤、山縣、間を置いて松方、井上等に優遇が與へられ、元老の政治的機能はこれらの人々が持つ經歷やその聲望に基くもの

で、それが稍々明確なる形式において現るゝに至つたのは第一次松方内閣の成立に端を發し、第二次伊藤内閣の時に現實化さるゝに至つた。これは内閣首班者に關する御下問において見出さるゝものである。その後歴代の天皇は執れも元勳優遇の勅旨を賜はるのを普通とし、これに基いて時に消長があるが、今日までこの特殊な政治的習慣が維持されて來たのである。故に所謂「元老」の發生は憲法の施行をして誤りなからしめんとする趣旨に基くものであつて、我が國に於てのみ見出さるゝ特別な政治上の習慣といふ事が出来る。従つてその機能も時によつて同一でなく、元勳の政治的性格と時代の情勢を著しく反映してをり、當初は藩閥と政黨勢力間の政治的調整に重點を置き、政黨勢力の確立以後は元老の政治的機能も比較的薄らいで來たものといひ得る。

蓋し政黨政治に關する習慣の確立は經過的な元老の機能を不必要ならしめたのである。この故に各元勳の逝去と共に元老の制度が消滅に近づき、大正から昭和にかけてその終末に近づいたのは當然である。

西園寺公が公を以て元老制度の最後の一人としようとする考へを持つたのも、一つはこ

の理由に依るのであつて、元老制度は政黨政治とその運命を共にしたものと云へよう。

後繼内閣の首班たるべき者の推薦に關する輔弼を如何にせば合理化し得るかは極めて重大なる問題であつて、この問題は取て政黨政治の時代のみに限らるゝものでなく、一般的意義を有する問題である。

齋藤内閣以來從來の元老に對する御下問は公の意志によつて間接的となり、内府が御下問を受けて奉答する慣はしを生ずるに至つたが、今後も恐らくこの習慣が引續いて維持される事にならうが、それにしても現代の政治的情勢の下に於いては輔弼者の機能がこの點に關して可成りに變つて來るであらう事は思惟するに困難ではない。

今後は責任が専ら内府に歸し、内府の人物と政治的性格如何は最も重要な意義を有するものとならう。普通の場合においては、重臣との協議を待つまでもなく内府が慎重に考慮の上奉答し、たゞ特別の場合においてのみ所謂「重臣」と協議して奉答する様な例は外國においても時折見らるゝ現象である。

孰れにしても重臣の機能が次第に薄らいでゆく事は寧ろ自然だといはなければならぬ

のである。

### 第五節 無省主義の合理化

第二次事變内閣の總理であつた平沼男が、新たに國務大臣に親任せられ、いはゆる無任所大臣として入閣するに至つたのは周知の通りである。

國政における指導力強化の客觀的見地から觀れば、今回行はれた無省主義の採用はその運用の具體的形式においては未だ創造的、主動的ではなく、既成勢力の配列變更による均勢維持の靜態的形式を多く脱却するに至つてゐないのは遺憾ともいへるが、尙ほ一面において今回の運用は、無省大臣制度そのものゝ現代的合理化を伴つてゐる點においては改革の強き決斷と明確な目的を前提としてをり、この限りにおいて、わが國政の將來のため悦ばしい現象といひ得る。

蓋し今日内閣の機構的使命である國政指導の能率を確保するがためには、總理の權限強

化を外にしては主として各省大臣の行政事務負擔を緩和し、以て國政の指導に努力するを得べからしむるか、または無省主義の併用により總理を中心とする指導の中核を構成せしむることを必要とし、特に無省主義の併用はこの目的のためには最もふさはしい方法として現代においては廣く行はれてゐる。曾ては景物の補助椅子もしくは政黨派間の摩擦緩和の暫定的妥協手段として見くだされてゐた無任所相の椅子が、現代においては指導力の機構的表徴であるかのやうに思はれることが多いのは、この故に自然である。

それであるから、非常時以來學國一致の國家的必要は、わが國においても無省主義の採用を必然的たらしめ、明治三十年代以後一般には殆ど忘れられたかの感ある無省大臣に關するわが内閣官制の特別規定が、再び世の注目をひくに至つた。が唯わが官制の無省大臣は、その歴史的原型においては十九世紀前半期樞密院中心主義のプロシア國のハルデンベルグ内閣官制の影響のもとに、藩閥内閣時代において主に總理の代理または兼任を可能ならしむるため、藩閥内部の行政技術的手段として設置されたものである。明治三十年代に至るまでの先例において、無任所相の任命が例外なく樞相に限られ、首相の代理または兼



任を目的としたのは、この理由を示すのに外ならない。従つて無任所相に對する俸給の定めもなく、先例の關する限り既に官職を有するものでなければ無任所大臣たり得ないといふ、あらゆる點で時代錯誤的な歸納的結論に到達するのは怪しむに足りない。

この點において今回單行勅令の發布によつて行はれた無任所制の合理化は、今日に至るまでこの制度の現代的運用を妨げてきた不合理な先例の拘束を脱却克服したものであり、内閣制度の改革に數歩を進めたもので、私は制度の運用においても爲政者の一般の努力を期待する。

## 第六節 官界新體制

いはゆる官界新體制は、第一には吏道の刷新を含む官吏制度の改革と、これが正しき運用の確立、第二には内閣制度を含む中央及び地方行政機構の改革とその一貫した運用を内容とする。

いづれも時代の進運が避くべからざらしめてある國家改革の一部であり、その行政的側面に過ぎないが、そのうち官吏制度の改革は既に所定の手續を経て無事斷行さるゝに至つたことは國家のため悦ばしいことといはなければならぬ。非常時歴代の内閣が企て、斷行し得なかつた改正であつて、政黨の解消や大政翼賛會の結成は暫く別としても、同じく昨年行はれた無省大臣制度に關する改革と相俟つて、正に新しきを迎へんとする世紀の末年の最も歴史的意義を有する事業であつたといへよう。

もちろん官吏制度の改革といつても、今回の改正に依つて行はれたのは任用、分限及び試験制度に關するもので、特に任用令の改正は官界の内外から廣く人材を登用するの途を開いたものであり、疑ひもなく未曾有の劃期的な改革であるが、なほ國防國家體制の客觀的需要からいへば、改革を要するものは深さに於いても廣さに於いても多々あるを免れない。とりわけ人事行政の全般に互る基本方針の確立、人事行政の統轄機構の設置、試験制度の基本的改革、性格及び技能の育成訓練を目的とする特別教育施設等は最も重要なものといへよう。後者はいふ迄もなく從來のやうな既存教育機關依存主義の基本的廢棄を意

味するものだ。

だが、官界の新體制が單に官吏制度の改革や、これに伴ふ人事の交流入れ替へ等によつてのみ達成されるものと信ずるのは間違ひだ。もちろん仕事における能率の質的並びに量的な低準性や、獨善その他の職業倫理的缺陷は、門戸の閉鎖、身分保障等に依る地位の獨占に由る處が少くないのだが、一方官僚の弊の社會的通念となつてゐる執務態度の形式主義や、繁文縟禮の傾向は、行政の獨立や權力の客觀的發動を確保し、役人を行政の自働的な機械たらしめようとする合理主義的行政機構法制の性格的所産でもある。

故に官界新體制を確立するためには、半世紀の間基本的に變つてゐない各省組織やその前提である内閣制度そのものに對して改革のメスを加へ、仕事の仕組そのものを實務本位に改め、制度の正しき運用を確保するためには、内閣の統制指導力を強化しなければならぬ。

とはいへ、今や太平洋の風雲は正に急を告げんとしてゐる。従つて機構の改革も重點主義により經濟及び治安に關する國防行政機構の確立を急務とする。國防委員會及び包括的

な經濟及び治安省の設置などは特に考慮される。

### 第七節 翼賛會の改組問題と臣道實踐の絶對性

私は昨年十月新聞紙上において新體制と臨時議會の表題のもとに政府に對し、既に大政翼賛會も結成された上は成るべく早い機會に臨時議會の召集を奏請し、大政翼賛運動に對する所信と責任を明かにする處置に出づるの望ましいことを説いておいた。

これ單に政府の責任や議會の憲法上の地位を重んずる趣旨からのみでなく、大政翼賛運動の劃期的性質とこれに伴ふ各種の疑念と誤解を速かに一掃せしめておくことは、翼賛運動の健全強力な發達のための合理的な措置と試煉でもあると信じたからだ。

ところが當時政府の態度はかうした要請に對して消極的であつたことは勿論、その後、於ても一般の期待に反し、別段疑念や不安を迅速に一掃するの積極的態度に出づる事なく、その結果は徒らに惡質のデマと現状維持主義者の策動や政情の攪亂を可能ならしむるに止

まり、純正強力なる國民翼賛の熱情に水をさし、最近に至つては翼賛會の精動化や改組問題すらをも傳へらるゝまでに至らしめたことは甚だ遺憾である。

新聞は翼賛會首腦の側における方針の不動を傳へてゐるが、これは當然のことであつて翼賛運動を骨抜きのものたらしめんとするが如き精動化や去勢的改組が今さら行はるゝが如きことありとすれば、それは大政翼賛の名を弄び、國民を欺き、その至誠を私用するに等しく、關係者は國民に對し輕率妄動の責に任じなければならぬ筈だ。

何となれば大政の翼賛といひ臣道の實踐といひ本來わが國體に源を有し、皇室を宗家とする日本民族の中心歸一還元の生命の律動であつて、絶對的でもあり不可侵のものでもあつて、一時の方便や手段として輕々しく利用さるべきものでは斷じてないからである。

休會明けの議會では大政翼賛會に關する各種の問題は、可なりに熾烈な質問の對象となりつゝある。政府は反對論者の質問を恐れ、または回避するの態度をとるべきではなく、飽くまでも公明正大これに臨み、國體と國防の絶對義に立脚し、所信を一貫するの良心と勇氣と叡智をもつべきである。臣道の實踐、職域奉公は不可侵的に正しく、これを基礎と

して生ずべき 天皇に捧げ奉る國民政治力の集結は絶對の必要である。

但しその産婆役たる翼賛會の機構には部分的に出過ぎの嫌ひあるものもあり、その人的構成や個人の言動には或は總裁の統制強化を要するものもあらう。さらに會の非政黨的性質や法的地位についての無用な誤解を除き、國家との關係を合理化するためには適當な時期に特別準據法を定むることも便宜の問題として考へられよう。

だが缺陷は運動に内在せず、運動を曖昧ならしむるが如き政府の軟弱不徹底なる態度と、措置そのものであることは特に反省を要する。

### 第八節 身分保障制度の撤廢

いはゆる身分保障制度とは廣く知られてゐる様に、文官分限令第十一條四の休職處分手續を指すものであつて、「官廳事務の都合」に基く「必要」に依り休職を命ずる場合には本人が手續の省略に同意を表した場合の外は高等官に在つては文官高等分限委員會、判任

官の場合には普通分限委員會の諮問を必要とする手續を意味する。

この制度は一般に知られてゐる様に、官僚の族外的、外部的勢力、特に政黨の不當な干渉壓迫に對して官廳人事行政の獨立を擁護するために、昭和七年に分限令の改正に依つて新に採用されたものであつて、従つて制度設置の歴史的、内在的目的からいへば専ら政黨政治の存在を前提とするものであり、國家行政の「政治的中立、乃至客觀性」が政黨の政權爭奪に依つて侵犯される危険を前提としてのみその存在意義を有する。

故に傳統的な政黨政治が既に過去の存在と化し、政黨がその傳統的な政權掌握の機能から絶縁の状態に置かれてゐる今日においては、問題の制度はすでにその本來の目的と機能とを失つた空虚無意義な形式に止まり機構に過ぎない。換言すれば身分保障制度は、政黨勢力の没落に伴ふその抗爭的對象の消滅と共にその目的、機能を變化し國家行政の公益を保護するのではなく、反對に人事行政の他の正常な機能を阻害し、立法者の豫期しなかつた病的機能を示すに至つたものである。

我が現行官吏制度の缺陷は、身分保障制度にのみ由來するものでない事は勿論だが、既

に抗爭の對象を失つた後のこの制度が、人事行政の機能を確保するために存するのではなく行政の公益とは兩立し得ない官吏の個人的利益を擁護するの働きをなし、正常なる淘汰をも妨げ官吏能率の維持向上を阻害し、官吏獨善を助長する觀ある事は否み難い事實だ。

されば總力戦下に在る歴代の事變内閣が戰爭の機能を強化するために、官吏の改革を考慮し、これに關聯して身分保障制度の撤廢がその中心の題目となつたことは自然であると共に、一方において撤廢の斷行が獨り樞密院側の空氣によつてのみならず、行政部内の反對態度によつて妨げられた事もあへてあやしむに足らないのであつて、この後の點は以て身分保障制度の變質化を物語るものに外ならない。

故に現内閣が此の制度の撤廢を閣議で決定するに至つたことは客觀的事態の進展がしからしめた所であるとはいへ、政府の斷乎たる態度は歓迎されるべきである。

私は閣議の決定が樞密院に對しても一貫して維持され、その反對によつて立消となる事のない事を望む者であると同時に、獨り身分保障制度の撤廢のみでなく、官吏の任用、昇級、官等、轉任、停年、官吏の教育等廣く官吏制度の改革上考慮さるべき各種の問題について

もこの機会に十分な考慮の拂はるべきことを望んで已まない。だがこゝに一言つけ加へておきたいことは、官吏制度の改革も現下の我國に取つて極めて必要であるが、内閣としてより重要であり緊急な問題は、内閣自身の政治的指導力の強化であり、その基礎たるべき國民運動の編成である。東亞新秩序の建設は唯我國自身の國家的改革によつてのみ始めてこれを期待し得べく、この前提を外にしては事變の收拾は遺憾ながら望めないといはざるを得ない。

## 第十二章 臨時中央協力會議

### 第一節 臨時中央協力會議の招集

國防國家建設の途上における最初の試みである臨時中央協力會議は、昭和十五年十二月十六日午前十時から翼賛會本部において、莊重實質な形式を以て三日間に互り開催された。

下意上達、上意下達を目的とする家族主義の會議であつて、會議員はすべて百五十四名、何れも下からの選舉に依らず、また運動や自薦に依ることなき、全く自由獨立な判斷に基く、上からの指名によつて選任されたものである。支部常務員及び六大都市代表等地方代表者百〇六名、並びにいはゆる各界代表四十八名、何れも職域を通ずるが、而も職域の部

分性に囚はるゝことなく、各々皇民として本能的に持つ臣道の實踐、翼賛協力の至誠至情を吐露し、下から持ち上がる力の強力な一步を印しようとするものである。會議の目的並びに性質上多數決に依らず、議事は議長の統裁によつて處理されるのは當然である。

議案はその數においては百數十件に達してゐる。もつと多かるべき筈だが、臨時の會議であるために多少戸まどひのせぬもあるであらう。議題を一瞥するに翼賛協力の下からの力を表現し、盛りあがらせる家族的な會議としては、更に根本的な問題に就ての論議がなければならぬのだが、この種の問題は恐らく政治や文化その他に關する質問において取扱はるゝことであらうと思はれる。整理一括上程し得るものが相當にあるにしても、なほ可なりに多數の議案であつて、各案に就て十分の審議を盡すためには、三日間の會期は短きに失する憾みがある。せめて一週間も與へられてゐれば、中央・地方の會議員ともに下意上達、上意下達の目的を達し得ることであらうが、今回は臨時會で已むを得ない事情もあるのであらう。

ともあれ最初の試みの最初の會議であるだけに、この會議をして模範協力會議たらしめ

なければならぬのであるから、關係者は責任の重きを感じ、全員一體翼賛協力の熱意を傾倒し、最善の努力を拂はなければならない。これがためには特に次の二點に注意してほしい。その一は代表會議にありがちな部分性と、これに伴ふ悪い意味の政治的技巧から完全に脱却し、一切の鬭爭對立や、これに伴ふ駆け引きから離脱することであり、その二は皇民としての純粹な感情と意思、民族の倫理と本能の生きた縮圖であり、皇民生活の偽らざる模寫であるべきことだ。かくしてこそ初めて協力會議は政府に對し議會に對しても意義あり價値ある存在たり得るであらう。

## 第二節 臨時中央協力會議所感

十二月十六日から三日間にわたつて開催された臨時中央協力會議は、いはゆる萬民翼賛一億一心臣道實踐の皇民意識に燃えた最初の組織的な催しであつて、その目的とする所はほぼ次の二點にあつたものと思ふ。

その一はいふまでもなく職分奉公の協力機能を發揚するものであり、その二は臣道實踐、國民組織促進強化の機能である。

協力會議は臣道實踐の民間的協力機關であり、職域並に地域代表者が各々その職分を通じて臣道を實踐し、奉公の誠を盡す協力翼賛の機關だが、現在の階段においては翼賛國民運動の促進中樞機構である翼賛會の本部及び地方支部が設けられてゐるに止まり、實際の運動を行ひ可能ならしめるためには全國にわたつて運動の手足を造るを要し、今回の會議は一面において下部組織を造り上げるための準備と促進の使命をも持つものといへよう。

かく協力會議は萬民翼賛の協力機關であり、かつは地方組織促進の任務をも持つてゐるので、今回の中央會議をしてその使命を果さしめるためには、機構においても機能においても色々な條件が具備されることを必要とした。

會議が議長總裁の自然的かつ實質的な家族主義の建前をとり、またその人的構成において地域と職能の各界を標準とし、何れも指名選任の方法によつたのはこの必要に基づくものであつて、機能の點からいへば會議は職分代表の性質を有するが、しかも部分的な利害

やこれに基づく相互摩擦によつて妨げらるることなく、和衷協同強力な奉公歸一の精神によつて指導一貫されることが必要である。

いひかへれば、代表會議の通弊である利己的な政治性から離脱し、専ら奉公の精神を目標とする國民生活の實在を率直に表現するものであることを必要とする。

今回の會議は臨時會議であり、會期も僅かに三日に限られ、準備も不十分であつたにも拘らず、國民生活の實在と奉公協力の精神を熱と誠とを以て一致表現し得た點においてはほど満足すべき結果をもたらしたのではないかと思はれる。

もちろん個々の點においてはなほ足りない點もあつた事は事實である。これは會期と準備の不足によるものであり、他の一はこれに關聯して各界代表の数が少く、かつその職域配分も釣合ひが多少とれてゐなかつた事によるものである。が大體においてこの種會議のもつべき機能は一通り現實に模寫し表現し得たものと信じてゐる。

今回の會議を通じて最も心強くかつ愉快に感じたことは、全員がよく議長及び委員長の統裁に服し整然かつ和衷の氣分のうちに議事が進行處理せられ、短い會期にも拘らず中央

地方ともそれ／＼公平に陳情發言の機會が與へられたこと、並びに下からもち上がる翼賛の力、國民的な協力の熱意が示されたことである。もちろん職域機關には多少緊張の場面が議場において示されたこともあつた。が、これは部分的な利益追求やこれに基づく對立ではなく、職域を通じてみた奉公熱意の表現の相違とみるべきものであり、話せばわかる日本魂、ことあげせぬ日本精神の脈が全員の上に躍動してゐたことは最も貴重な會議の力である。それであるから、今回の會議が最初の協力會議として協力國民組織促進の機能をも果し得たものといひ得るのであらう。

下部組織の迅速なる實現に對する要望並に翼賛會中核力の強化に對する強き熱望が全員の間で充ちてゐたことは注目に値する。

一應は機能を果たしたわけであるから、會議の今後の發展を確保し全國民的な翼賛組織を確立するがためには、翼賛會本部は政府と協力し下情上通を最も有效ならしむべき任務をもつわけである。私は萬民奉公の國民的組織が今回の協力會議開催を期として速かに實現展開せられ、國難突破の力強き組織たるべきことを熱望してやまない。

## 第十三章 下意上達機關としての中央協力會議に就て

### 第一節 はしがき

所謂、下部組織の結成に先だち去る十二月十六日から十九日迄三日間に互つて、臨時中央協力會議が國民の大なる關心と注視の下に大政翼賛會の本部に開かれ、豫期以上の成功を収めた事は周知の通りである。元來協力會議は、國防國家體制の建設を目的とする大政翼賛、臣道實踐の國民運動が集約發動される「場」であり、而して中央協力會議は其機構的な中心であり、焦點とも謂はれ得る機關であつて、今後下部組織の全國に互る結成に伴ひ度々開催される會議であり、また新體制下の最も特色あり重要な意義を有する機關であるから、此處に其性質、機能其他に就て一應の記述解説を試みる事は、敢て無益の業でも



あるまい。

## 第二節 協力會議の精神

協力會議は、大政翼賛運動の組織であり、其機構的な現れであつて、従つて協力會議の基本的性質を知るがためには、前提とする大政翼賛運動其ものに就て正しい理解を持つ事を必要とする。

此點に於て先づ第一に大政翼賛は、其本質に於て宇宙の構造原理を直觀的に表現する唯一無二の我國體に其近接の原動力を有し、皇室を宗家とする日本民族の世界觀に内在する純粹、固有なる日本的な生命の律動であつて、何等の意義に於ても異國的又は外來的な行動で無い事に注意されなければならない。大政翼賛運動が其消極的側面に於て反自由、反民主、反共產主義的であつて、此點に於ては、一見歐洲の全體主義と類似するが、而も其積極的側面に於ては、専ら臣道の實踐を基底とするものであり、而して臣道の實踐は皇室を

宗家とする日本民族の中心歸一、還元の本然的作用であり、國土と血の紐帶に基づく日本民族の極めて自然的且つまた倫理的でもある求心行動であつて、歐米の政治の場合に於て見る様な、謂はゞ「人爲的」「後天的」な「指導者」に對する歸一服従の劃一運動とは根本的に其性質を異にするものである事は此故に當然である。

第二に大政翼賛運動は、斯くの如くに其臣道實踐の基底に關する限りに於ては、萬世一系の天皇を奉戴し皇道を理念とし實在ともする唯一無二の我民族國家に内在する當然自明の運動であり、不動の國體に基く運動であるから、之を以て 天皇に依る國家統治の實體法則に矛盾する運動たるが如くに思惟するものありとすれば、其は其は曲解か、然らずんば、我唯一無二の國體の本質を知らざるも甚だしい誤見と謂はざるを得ない。かうした見解は大政翼賛運動の機構的外形や、此運動に關して現はれた一部の人々の行過ぎた、又は全く誤つた言動等を念頭に置いて此運動がナチス其他の異國風の政治を國事に行はんとする運動なるが如くに速斷するの誤りに基くか、然らずんば我國體に基く統治の普遍、絶對性を理解する事なく、合理主義や形式主義の自由民主主義的法律及び政治思想にとらはれ

統治現象を合理的な國家的機構を通して現はるゝもの、又はかくの如き機構に依つて認められた現象にのみ限るものとし、合理的な機構の外に於て現はれる臣民の自然的、自發的な國家的政治的運動を以て國情に反するものゝ如くに考ふる誤りに由るものに外ならぬ。かくの如き合理主義と形式主義の國家觀こそは、我民族國家の本然的構造や性質を無視し、國家生活を機構化し、我民族國家の創造的發展を阻碍するものであり、訂正されなければならぬ態度であらう。

第三に、大政翼賛運動は以上述べた様に我が國體を基礎とし、前提とする臣民の天皇に對し奉る歸一の運動であり、國家に對する奉仕の運動であつて、其本質上憲法に反するものでなく、また反するを許されない事は言を俟たない。此運動は、我が國體と相容れず我が憲法組織と相容れない一切の政治形態や運動に對する否定の強く、明確なる意識の下に積極的に専ら我が國體を基礎とし、我憲法を前提とし、其下に於て而も形式的な法的關係の表面に止る事なく、直接に皇民意識の發露に基く臣道の實踐に依り、大政翼賛の國民的結束を可能ならしめんとするものである。

故に大政翼賛運動は、我が憲法の認むる原則や機構を無視し、又は歪曲せんとするものではなく、むしろ其根本趣旨を非常國難の危機に於て確保し、其足らざる所を補はんとするものであつて、從つて完からしむるものでこそあれ、之を阻害する所以のものではない。蓋し、我が憲法並に法令の定むる各種の機構は統治の合理的側面であつて、其性質上、之が機能には自ら一定の限界があり、現在の歴史的危機に應ずるがためには、補充を必要とすることは非常時以來の國政が最も良く之を實證する處である。大政翼賛運動は即ち此需要に應ずる所以であつて、幸ひ我が民族社會の構成とこれに關聯して培はれて來た國民の生死を超越した忠君歸一の精神は、非常時に於て合理的な近代の法治機構の統治機能に於ける制限を補ふに足るものがあり、外國に於て法は國家的統治の最大限度たりの觀あるに反し、我國に於ては其最少限度たるに過ぎない。

一旦緩急あれば義勇公に奉じ、一死國に報ゆる至誠奉公の精神の實在は、我が國體精華であり、其不可侵たる所以であると共にまた如何なる國難の突破打開をも基本的に確保する所以でもある。されば大政翼賛運動はかくの如くに法並に其定むる國家的機構を嚴守す

るが、而も法の形式的手段を超越し、無限の自由と本然さを以て發露する一君萬民の民族的大精神に謂へ、之を對象とするものであつて、其目的とする處は革命でもなければまた獨裁でもなく、専ら皇道翼賛の臣道體制であり、我が國に固有する國家的道德の國民的實踐に外ならない。

### 第三節 協力會議の組織と機能

協力會議は以上述べた様な根本精神を其生命とする機關であつて、其性質、目的並に機構は、大政翼賛の根本精神に依つて制約されるものであり、其根本精神を逸脱するを許されない事は當然である。

先づ第一に協力會議の性質であるが、此機關は民間の組織であつて、政府の機關でもなくまた法的基礎を有する公共團體の機關でも勿論ない。ただ總理大臣、各閣僚其他の政府の首腦機關が夫々翼賛會の總裁、顧問、參與等になつて居り、而して會の首腦機關の多く

は總理大臣たる地位にある總裁の指名選任する處であつて、此點に於て翼賛會は内閣又は省附屬の諮問建議の補助機關たるが如き觀を呈してゐるが、翼賛會が官制其他の法規に依つて設置された組織でない事はいふ迄もなく、政府の首腦機關が同時に會の機關たる地位にあるのは、其職務上の地位に基いて當然に然るのではなく、政府の首腦機關たる地位に在る者の獨立の判斷に基くものに外ならない。かく政府の首腦者が揃つて民間の組織の役員たる事は從來例のない事で、従つて色々な見解も生じて來る譯だが、これ翼賛運動其もの唯一特異性に由るものであつて、型を異にする過去の事例を基礎として、此問題を判斷批判せんとする事は、的を失するものと謂はざるを得ない。

かく協力會議は民間の組織であるが、同時にまた政治的性質を有する組織である事も明である。大政翼賛會が政黨であるか否か、従つて治安警察法の適用を受くるか否かの問題を生ずるのもかうした政治的性質に基くものである。だが、大政翼賛の機構が所謂政黨でなく治安警察法の意義に於ける政治結社でない事は、言を俟たない。何んとなれば、所謂政黨又は治安警察法の意義に於ける政治結社は特殊な世界觀や利害に基く「政治的」結合

であり、其は身分部分的であり、特殊な結合であり、従つて國家的見地から見て警察法上の取締を要し、行政上の準據法を必要とするものであるが、之に反して大政翼賛運動は、我が國體を内容とする日本民族の世界觀其ものに基礎を有する臣道實踐と大政翼賛の第一次且直接の普遍的、無條件的意義を持つ行動である。其目的、趣旨の本源の性質から言つて、自由主義的な傳統的「政治」運動と基本的に異り、治安警察法の既に述べた意味における適用の區域外に在る現象である事は當然である。

此運動が政黨や政派の様に特定の個人を總裁とする事なく、専ら 天皇の親任し給ふ輔弼の機關たる地位に在る人を總裁とし、又は顧問とする所以も此運動の臣道的、翼賛的性質と其國民的普遍的的に基くものであり、政黨の如くは政權の爭奪、抗爭、批評を目的とするものでなく、専ら皇室を宗家とする一君萬民、忠孝一本の我が大家族的民族國家の民草が其の倫理でもあり、また本質とも謂ひ得る臣道の實踐に、一億一心各自が直接に其生業、生活の本態に於て奉公の誠をいたし、職分奉公以て大政を翼賛せんとする趣旨に基くものである。固より大政翼賛運動は發足して日尙淺く、運動の機構や人的側面に於て

は一日も速やかに補正さるべき缺陷も少くないであらうが、之が爲に大政翼賛運動に對して消極的又は否定的な態度を採らんとするのは、本末を顛倒するものであつて、國民は其趣旨目的を正しく理解し、非は非とし、之が健全なる發達のため最善の努力を拂ふべき責務を有するものと謂ふべきである。將來或は、政府に於て特別基準法を制定する様な事もあるやもしれないが、其は自ら別個の立法政策上の問題である。

臣道の實踐は、第一次的且具體的には、職分奉公として現はれ、職分を通じて大政翼賛となつて現はれるが、今や我國は全力を擧げて國防國家の建設に邁進しつつあるが故に、翼賛上最も緊要な事は上意下達、下情上通の道を確保し、以て協力を可能ならしめる事にある。協力會議は此の目的を可能ならしむるが爲に設けられた組織であつて、中央協力會議は地域代表、並に職域代表を議員とする全國的な機關であり、議員は任期一年、總て下からの選舉によらず、總裁の指名に依つて選任される。

舊臘開かれた會議は、下部組織の結成に先立つて催はされたものであつて、臨時の性質を有し、議員の數も地域代表、及び職域代表を合はせて百五十四名、うち職域代表は四十